
ソウルスティール！

都筑遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソウルステイル！

【Nコード】

N7553X

【作者名】

都筑遥

【あらすじ】

魔界随一の大帝国・ハインシュベルクの魔王直系第二子に生まれながらある理由によりソウルには王位継承権が存在しなかった。それでも特に何不自由なく暮らしていたソウルへとある日凶報がもたらされる。従姉ルクエルによる第一王位継承権篡奪だ。元老院より第一王位継承権の承認を得たルクエルはソウルへと宣告を下す。

「私はお前を愛人にするわ」――

己の身と誇りを守るため、ソウルは諦めていた王位篡奪へと乗り出

した！

そんなあらすじですがノリは軽いです。

プロローグ

「ソウル」

「――何だ、ルクエール」

女の声に呼び止められ、ピクリと肩を震わせた後若干嫌そうにソウルは足を止めて振り返った。その視線を受け止め、ふふんとルクエールは髪を掻き上げ傲然と笑う。

「今さっき、正式に元老のジジイどもから要請されたわ。次の王は私よ、ソウル」

「だったら何だ。俺には関係ない」

溜め息をついて、ソウルは面倒そうにルクエールの隣をすり抜け立ち去ろうとした。付き合って楽しい話でもない。

「関係無くないわよ」

「俺を追放でもするか？」

目を細めふんとソウルは鼻で笑う。有り得ない事だったからだ。例えばルクエールが王になってソウルの追放を望んだとしても、何もなければ周りがそれを許すまい。ソウルは自他共に認める天才だからだ。あらゆる分野において。

「まさか。私がお前を追放なんてするはずないでしょう？」

「ハッ。言っとくが俺様はお前の治世に手を貸すつもりは無いぞ。何でも勝手にすればいい。俺を巻き込むな」

「ふっ。相変わらず強気なのね」

「当然だ。俺様に恐れるものなど何もない」

腕を組み、にやりと凶悪に笑って威嚇するようにルクエールを見上げるが、相手はその目を捕えて嫣然えんぜんと微笑って見下ろして来た。

（――？）

何かが違う、とソウルの中で警鐘が鳴った。

「ソウル」

「……何だ」

「私はお前を愛人にするわ」

「……………は？」

何の聞き間違いだ？

「お前の血を王家に残す気はないけれど、私はお前を気に入ってるわ。安心なさい。夫にはしないけれど私が一番可愛がるのはお前よ、ソウル」

すいとそのまま屈み込むと、啞然としたソウルにそのまま口付けた。

柔らかい女性の唇が離れて、数秒。フリーズしていたソウルによりやく再起動が掛かる。

「なっ、なっ、何しやがんだア――ッ！」

女に。女からキスされた。

ファーストキスは絶対相手に目を瞑ってもらって自分が上から唇と落としたかったのにッ。

「貴様アツ！ この屈辱、忘れんぞっ！」

涙目になって怒鳴るソウルにやだ可愛い、とか言っただけルークエールはぎゅうとその体を抱きしめた。

ソールステイリッヒ・バルⅡアク・ハインシュベルク千と二百六十六歳。

この日生まれて初めて、諦めていた王位篡奪の野心に火を付けた。

第一章 欠落王子と欠落魔術師

「っがアアアア！ 今思い出してもはらわたが煮えくりかえるわーっ！」

「それはソウルが隙あり過ぎなんだろうーな」

この日何度目かのソウルの絶叫に、パリパリとスナック菓子を食べながら、律義にソウルの異母兄であるラーは同じ相槌を繰り返した。

いや、同じセリフを繰り返しているだけなので律義とは言えないか。明るい金髪と赤い瞳、顔立ちは若干きついが申し分のない美形で、絶対将来追いこしてやると誓う程度には背も高い。怠けて殆ど動かないくせにスタイルは一向に崩れないのだ。

今年で七千を数える異母兄ラーとは対照的に、ソウルの色彩は若干鈍い。灰銀の髪と研がれた鉄色の瞳。人の体年齢で言えば十一、二程の幼体なので歴然たるラーとの差がちょっと悔しい。

「貴様アツ！ 大っ体貴様それでいいのか！ 王の直系は貴様なのだぞ！！！」

「あア、別にどうでもいい。めんどい」

「『面倒』まで平仮名にするな余計気が抜けるわ！」

「っーか人の部屋来てどうなんだお前」

怒鳴り散らすわ部屋の主に文句付けるわ。
面倒そうに呟いた後、次のセリフはやはり。

「まア別にいいけどな」

大体の事にやる気が無いのでそこに落ち着く。こいつに沸点とい

うものはあるのかと思う程に、ラーが感情を動かす事そのものがあまり無い。

「貴様が真っ当に王位継承権を守っていればこんな事にはならなかったんだ！」

「人に頼るなよ。お前だって直系だろ、一応」
「判っておるわ！」

イライラとソウルはラーに怒鳴り返した。

ソウルとラーの父は現在の魔王だが、ソウルには王位継承権が生まれた時から存在しなかった。

理由は、ソウルが人間とのハーフだから。

別にそれはそれで構わなかった。判らなくはなかったし、反発する者を抑えてまで王になりたい訳でもなかったのだ。

しかし――……

「何が嫌なんだ？ ルクエールはイイ女だろ」

「俺の好みじゃない。大体愛人だぞッ！ 愛人！」

「気楽でいいんじゃないか」

「いい事あるかァ！ お前は言われりゃ頷くのかッ！？」

「頷かねェな。女の機嫌取んなアめんどい。勝手に乗るなら構わね……いややっぱ嫌だな。ダルいし」

「どんだけヤル気無いんだ貴様……」

食べ終わったスナック菓子の袋を潰してポイとゴミ箱に投げ捨てると、のそりとラーは起き上がる。

「で、どうするんだ？ 逃げる手伝いでもして欲しいのか？ しねえけど」

「たわけ。ここまでコケにされて引き下がるか。俺がルクエール

から王位継承権を奪ってやるのだ」

「――へえ？」

すいと目が細められ、初めてラーは感情を微かにではあるが動かした。楽しそうな笑みがその唇に浮かんでいる。

「お前が？　本気で？」

「当然だ！」

「それを言いに来たのか？」

「そうだ。どうする？」

いかにヤル気の無いラーとは言え、やはりハーフの自分が王位を継ぐのは氣にくわないかもしれない。

（それならそれで構わん。それでも俺の意思は変わらんからな！）

これから思うと少し鈍い痛みを覚えるが、どうせ避けて通れない道。ここではつきりさせておきたい。

「言ってるだろ、面倒くさい。とにかくどうでもいいから俺を巻き込むな」

「関わらんならそれでいい」

「……本気で一人でやる気か？」

「勿論だ」

ソウルにも勿論お付きの部下は何人もいる。しかし王位を狙うとなると信用できたものじゃない。

「出来りゃ面白いとは思うけどな。一応言っというてやる、止めとけ。お前を良く思わない奴は多い」

「知っているとも」

人間とのハーフであるソウルが王子として何不自由なく暮らせているのは、王がソウルを息子として認めているのと、ソウル自身の才。そして何より――害にならなかったからだ。

「だからどうした。別に誰に気を使っていた訳でもない。俺に必要ならば奪い取るまでだ！」

「ふうん。ま、頑張れ」

「……」

「どうした？ 用は済んだろ。俺は寝る」

「眠れば良いだろうが」

「……」

別にソウルが居て眠るのに邪魔という事はない。というかラーに他人を気にするような可愛い神経は無い。だが。

「……怖いのか」

「なっ、何をっ！」

「ソウル！」

ばん、と遠慮も何も無くラーの部屋の扉が開かれルクエールが入ってきた。瞬間ソウルは明らかに『げっ』という顔をして身を引き、ラーは変わらぬ抑揚のない眼で扉の方を見た。

「やっぱりここだったわね」

「っーかお前！ ここはラーの部屋だぞ！」

「それが何？ 今王の次の地位にあるのはこの私よ」

「ぐっ……」

今までは王の次に地位が高かったのは、第二妃とはいえ本来ならば王妃に相応しい地位を持つシュツイルオーレを母に持つラーだった。

今までずっとラーは血筋と能力の高さから次期魔王と期待されていたが、あまりのやる気の無さについて元老院も諦めルクエールで妥協したのだ。

前々からソウルはルクエールにちよっかいをかけられる度、よくよくラーの部屋を利用していた。勿論ルクエールもそれは知っている。だが王の姪とはいえ直系第一子のラーの部屋まで踏み込む事は出来なかったのだ。

ルクエールは既にラーから王位継承権を奪い取る事を決めていたのだ、下手にラーの不興を買って邪魔をされては困る。そうしたら自分が不利——というよりも絶対的に無理なのはよく判っていたので、もつともラー本人はルクエールが入って来た所で気にしなかっただろうし、それが判っているからルクエールもこうして今は踏み込む心積もりが出来た訳だが。

「な、何の用だ」

「何の用も何も、お前は私のものなんだから私の側が定位置なのよ」
「勝手に決めんな！」

くすくすと綺麗な顔で微笑まれてもソウルの肌には鳥肌しかたない。美人かどうかはこの際関係無い。自分の意思の介在しない物事がとかくソウルは嫌いなのだ。

「ふ、ふん！ まあ丁度良かった！ ルクエール、貴様に言うておく事がある！」

「あら、何？」

「貴様の愛人など真っ平ごめんだ！ 貴様の持つ王位継承権、この俺様が奪ってやるから覚悟しておけ！」

ソウルのセリフを聞き終えた後、きょとんとルクエールは静止して、それから弾かれたように笑い出した。

「お前が？ 王位を？ ふふふつ、中々面白い冗談だわ」

「誰が冗談など言っとるか！」

「――本気なの？」

小馬鹿にしたように笑い続けていたルクエールが、ピタリと笑いを止めてソウルを見据える。覚悟を決めて王位を奪った女傑の眼で。

「無論本気だ！」

「諦めの悪い子ね。まあいいわ。お前のそういう所も結構好きよ。従順なだけじゃつまらないものね？」

ペロリと唇を舐めてルクエールは毒々しく笑う。

「陛下の血を継いでいるとはいえ半端なお前がどうやってジジイどもに納得させるのか……楽しみにしているわ」

「ふん！ その余裕にスカしたツラ、すぐに吠え面に変えてやるわ
！！」

腕を組み、自信たっぷりと言い放つ。何も考えちゃいなかったが人生ハッターも必要である。

「まあそれはそれとして――」

「っ？」

毒々しい笑いを引っ込めて、今度は熱の入った視線をルクエールはソウルへと向けた。

「お前が私から継承権を奪うまではやはり私の方が立場は上なのだから、大人しく相手をなさい、ソウル！」

ヴッ！

魔力で生み出した槍を手に構え、ルクエールは床を蹴る。

「ごめんだ馬鹿者ッ！」

対抗するべくソウルも大剣を創り出し自分に突き出された槍を打ち払うと、早自分に関係は無いと寝転がって傍観しているラーの上を飛び越え間合いを取る。

大人しく武術の技量だけで戦っていれば問題は無かった。しかし間合いを取ったソウルが呪文を唱え、その集中した魔力の大きさに流石にぎよっとしてラーは体を起こす。

「おい！ ソウルお前——！」

「アグニス・フレア！」

火炎系最強呪文を躊躇いなくソウルは発動させる。他人の室内で。

「いいわ……ッ。お前の魔力、ゾクゾクするのよ……っ」

瞳孔を見開き嬉々とした表情で、ルクエールも部屋を埋め尽くす火炎へ向けて手を翳す。

「ラキュラス・クール！」

互いに相殺され、ソウル側には焼け焦げ、ルクエール側には氷結の跡を残してその膨大な魔力は消失した。

「ふん！ 貴様を殺せば王位がどーのとか面倒な事をする必要もない訳だしな！ 今ここでケリつけてくれるわ！」

「いらっしやいな！ お前が負けたらお前は私のモノよ！」

「ほざけ！」

互いに再び床を蹴り肉薄し――

「つてか俺の部屋は止めろ」

白熱した二人の間に怒りに酷く冷めた声でラーが割り込んだ。ばさりと背から鳥類の翼を出し羽根二本を引き抜いて、ソウルとルクエールの足元に突き刺す。

「うっ！」

「きゃっ！」

ばち、と羽根が発した雷に弾かれ二人はそれぞれたたらを踏んで後退する。

「俺を巻き込むなっつってんだろ。余所で戦れ」

ほぼ全ての事に対し無気力なラーではあるが、否応なしに自分が巻き込まれる事態は嫌いである。ましてそれが安息の場である自分の部屋ならば尚更だ。

パリパリと発現した魔力が雷となってラーの髪をうねらせる。おそらく本人にしてみれば怒りと共にほんの少し表に現れただけの、意識もしていない程度の量の魔力。

――だがそれにすら、ソウルとルクエールの肌には鳥肌が立って自然体が逃げようと後ずさる。

『う……っ』

息を飲んで、空気が張り詰め、動けずに固まったままただラーの姿だけから目が離せない。

ふう、と息を吐いたただそれだけの仕草に、びくっ、とソウルとルクエールは揃って肩を跳ねあげ思わず互いの手を握り締めた。

「俺は外で一眠りしてくる。――戻るまでにきっちり直せよ」
『ハイ……』

魔力の発現が収まってふわりとラーの髪が自然のままに背に流れ、ほっと二人は肩から力を抜き――互いの手を握り合ったままなのを、一歩早くソウルが気が付き手を離して飛びのいた。

「あん」

「気色悪い声を上げてる場合か！」

「……そうね」

いつ気紛れにラーが戻って来るか判らない。戻ってきた時にまだ直し切れていなかったら――ぞっとする。

ぶるりと身震いをして、二人は共に休戦をしてラーの部屋の片付けを始める事にした。

「全く、酷い目にあったぞ」

時間遡行の魔術を行使し何とかラーの部屋を元通りにし、やれやれとソウルは第一庭で座り込んで一休みしていた。

流石にルクエールの方でも気力、魔力ともに使いきったらしく、再戦とはならず、そのままどこかへと消えて行った。おそらく部屋で休んでるのだろうが、正確な行き先など知った事ではない。かち合いさえしなければ。

だがその心配もさしてしていない。実は第一庭であり一番広い敷地を確保しているこの庭には、魔王とソウル以外の者は来たりしない。ここは生前、ソウルの母が作っていた庭だからだ。

ソウルに母の記憶は殆どない。自我が確立する前に人の寿命は尽きてしまう。

（別に覚えておらん相手の事などどうでもいいがな）

——母が人間だったせいで、今自分はこんな面倒な立場に置かれているのだし。

ここに来るのも煩わしい他人がここには入ってこないから。——それだけだ。

「——？」

何となく面白くない気分でふてくされていると、ソウルの視界にひらりと翻ったレースの袖が見えた。

見間違いではない。

（この俺が気配を感じ取れんとは）

視覚で捉えなければおそらく気が付かなかった。判っている今も相手の気配を感じ取れない。

（面白い）

それ程の手練れがこの魔王城に侵入してくる目的と、何よりその人物自身に興味が湧いた。

今の今までソウルは気配を隠していなかったから、向こうはソウルの存在に当然気が付いているだろう。今から気配を殺して追うのは怪し過ぎるし、かといってただ追いかければ逃げられるおそれがある。

（向かってくりや問題ないんだがな）

しかしそうしてくれるかどうか判らない以上、それも上手くない。

（つー事は、やっぱアレだな）

す、と座っていたベンチから立ち上がり――ソウルは思い切り地面を蹴り、走った。

「動くなッ！」

びりびりと空気の震える大声で怒鳴ると、『きゃっ』とかこうまで綺麗に気配を消せる使い手にしては間抜けな悲鳴らしきものが上がった。

大体の方向は合っていたが、声を出してくれたおかげでよりはつきりと判った。ニヤリとソウルは口元に凶悪な笑みを浮かべ、追い付いた声の主へと手を伸ばす。

「何者だ！」

「きゃあっ！」

力の限りソウルが捕まえた腕は、柔らかくて細かった。

「お——……女っ？」

逃がさない様かなりの力を入れてしまっていたから、慌ててソウルは手を離す。

「はう。びっくりしたあ」

ソウルに掴まれていた腕の部分をさすりながら、女——というよりも十五、六程度の少女だ——はほっと息をつく。

「何だ貴様は。人間だな？」

何だか拍子抜けして、投げやりにソウルは少女に訊ねた。

ソウルは人の気配を探る時、魔力で探査する。いや、ソウルだけではなく魔族の大方はそうだ。魔力のない魔族はいないので方法として間違っていない。

その方法で気配を感じなかったのは何の事はない、相手の魔力が最早無いと言っている程に乏しかったからだ。

人間と比べはるかに強い魔力を持つ魔族にとって、人間などそもそも取るに足りない生き物である。はや興味は半ば以上失せていた。

「うん、そう。マナっていうの。君は？」

腕を掴まれた瞬間は本当に驚いていたようだが、ソウルの容姿に腰を屈め、視線を合わせてにこやかに話しかけて来た。

——明らかに、自分よりも幼い者に向けての話し方で。

「たわけ！ 俺様は千二百六十六歳だ！ 貴様等と同じ物差しで測るでないわ！」

「ええっ！」

驚きの表情で仰け反ったマナにふんと鼻で笑ってソウルは溜飲を下げた。

「まあ無知な輩という事で今回は許してやろう。俺様はソールステイ・リッヒ・バル・アク・ハインシュベルク。この国の王の第二子であるぞ！」

「王の……って、王子なんだ？」
「その通りだ」

腕を組み、ソウルは相手の視線を感じながら鷹揚に頷く。悪くない気分で。

「本当に？」

「見れば判るであろうが！」

「いや見ただけじゃ判らないけど」

「む……っ。この俺様の高貴さを解さんとは……。無知なだけでなく感性までも曇っているようだな」

「どっから来るの、その自信……」

自分を貶める言われようだが、ソウルの言い方があんまりなので怒りよりも呆れの方にマナの心は占められた。

「じゃあ、本当に、本当に王族？」

「だからそうだと言っておろうが！」

「じゃあ——私と契約して！」

がつ、と勢い良くソウルの手を握り、マナは色々あるべき段階を吹っ飛ばしてそう言った。

「は——ア？」

啞然としてソウルは口をぽかんと開けたまま固まって——すぐにかつと怒りに頬を染めてマナの手を振り払った。

「ふ——ふざけるなッ！ 俺はこの国の王族だぞ！ それを、それを——！」

軽々しく扱われた——。

それはソウルが見ないようにしているコンプレックスをまともに刺激してくれた。

「貴様のようなロクに魔力も持たん小娘が契約しろだと！ ふざけるなッ！」

「——っ」

びくとマナは身を震わせ、拳を硬く握って耐えるように唇を噛んだ。その表情はすぐにでも泣きだしてしまいそうで。

「お、おい？」

自分は悪くない。悪くないと思うのに、何故か悪い事をした気分になる。

「判ってるわよ……っ」
「っ？」

顔を上げてきつとソウルを睨んだマナの眼には、やはり僅かに涙が滲んでいた。しかしそれでも泣くまいとする意思が叫ぶ事で思いを散らそうとする。

「だから強い魔力を持った相手と契約しなきゃいけないのよ……ッ！」

「まさか、その為に魔界に侵入したのか？ 自分の眼で見定める為に？」

「それもあるけど、私の魔力じゃ喚べる相手が限られるのよ。だから直接交渉しに来たの」

「ご苦労な事だ」

原則、魔界は人間を受け入れない。マナが落ち着いたのにほつとしつつ、しかしソウルは冷たく突き放すセリフを吐いた。

その熱意は買ってもいいが、だからと言って契約してやるつもりなど更々ない。

「駄目なの？」

「駄目だ」

「そこをなんとかっ！」

「くどい！」

どんなに言われようと御免である。何より。

「強ければ誰でもいいという態度が気に食わん！」

「うっ……」

尤もと言えば尤もなソウルの怒り。反論できずにマナは言葉に詰まった。

「さっさと帰れ。己に釣り合はん相手と契約する物好きなどいるものか」

「待って！」

「ぐうえッ」

立ち去ろうとしたソウルの襟首を掴み引き止める。焦っているのか思い切り引っ張られたので本気で息が詰まった。魔力で肉体強化していない時の体の強度は、魔族であっても実は人間とそう変わらない。

本気の悲鳴にマナの方も慌てて手を離し、ソウルは地面に手を吐いてゲホゴホと咽た。

「なっ、何をするか貴様ア！」

「ご、ごめん。焦ってたの。つい」

「ついで首を絞めるな可愛気のない！ 袖とか裾とか、色々あるだろーが！」

「……君、乙女だね……？」

女性に求める挙動が、ソウルの方が余程乙女だ。マナの言葉にがっつ、と明らかにショックを受けた顔でソウルは仰け反った。

「な、なっ、何をッ！ 女に女らしさを求めて何が悪いか！ 俺はなあっ、図々しい女は嫌いなのだッ！！」

ソウルの理想像は何年にもおけるルクエールのトラウマからともいえる。

「私もそれはそーだと思うけどそこまでわざとらしいのは要らないなー。ってか、出来ない。ソレ出来るの計算づくの子だと思うよ。むしろ可愛くないと思った方が良好い」

「うううっ、うるさいッ！」

聞きたくないとばかりに言葉に噛みつくソウルにマナは肩を竦めて反論しなかった。

そのマナの態度は腹が立つ。腹は立つが——これ以上この論争をしなくなかった。

「と、とにかく！ 貴様と話す事など何もない！ さっさと帰れ！」

「契約するまで帰らないって決めて来たの！」

「だったら勝手にしろ！」

「だから契約して！」

振り払おうとするソウルの腕をしっかりと掴み、ずるずる引き摺られながらもマナは手を離さなかった。

「他の奴を見繕えば良からうが！ 俺様程でなくともそれなりの魔力の持ち主ならゴロゴロしておるわ！」

「君が良い！」

「誰でもいいんだろうが！」

「誰でもいいけど君が良い！」

マナとて魔界に来る事に恐怖がなかった訳ではない。初めての遭遇であるソウルがそう話せない相手でもなかったのに、正直ほっとした。

「訳が判らんぞ貴様ッ！」

遠慮なくズルズルと引っ張っているのに、マナの手は離れない。中々の握力だ。

「——お前、何かやってるのか？」

いっそ感心してしまつて、溜め息をついて立ち止まるとソウルはそうマナに訊ねた。

「うん。武術は一通り」

「ふうん？」

少しばかり興味を持ってソウルはマナの肩を、腰を、足に触れ。

「何してんだアツ！」

ゴッ！

「っだアツ！」

当然と言えば当然だが、思いつきりマナに殴られた。

「何っ？ 子供な容姿しててアンタ痴漢ッ？」

「誰が痴漢だアツ！ つーか俺様は子供ではないゆうとろーがっ！」

「だったら確実に痴漢でしょーが！ 勝手に腰やら足やら撫で回してきたら何を言おうと痴漢よ！」

マナが正しい。ソウルがマナの体を触ったのに性的な意味は無かったが、言われて気が付きぶんぶんと首を思い切り左右に振る。

「違っ、違うぞ！ 単に体つきを見ただけだっ」

「紛う事なく変態のセリフよ！」

言い方が悪い。よりマナの軽蔑の視線は痛くなった。

「だから違うと言っとうろーが！ どの程度鍛えているのかを見ただけだっ！」

「あのねえ！」

そんな言い訳——と更に怒鳴ってやろうとしたが、しかし目の前のソウルはどうやら本気らしかった。

「それでも許可なく触りゃ殺されたって文句言えないわよ」

「殺っ……」

「当っ然でしょ」

そこまでかっ？ と顔を引きつらせるソウルにマナはきっぱりと断言した。

「あんただって知らない奴に尻やら腰やら撫で回されたら嫌でしょうが」

「うっ……」

今まさにルクエルから己の意思と無関係に愛人にされそうになっているソウルとしても反論できなかった。

「で？」

「……で、って何だ」

「自分が悪い事をしたって自覚はあるのよね？」

にっこり、と笑ったマナの顔にうっと呻いてソウルは後ずさる。マナが何を求めているかは判る、判るが——

「おっ、俺様は謝らんぞ！ ハインシュベルクの王子たるこの俺が

人間ごときに謝ってたまるか！」

「じゃ、謝んなくていいから契約して」

「なっ！　けっ、結局そこに戻るのかっ！」

「だってそれが目的なもの！」

マナの言葉にソウルはくらりと目眩がした気がした。こんな事になるならいっそ痴漢で通した方が良かったか——いや駄目だ。やはりそんなのは耐えられない。

「わ、判った。じゃあ俺より強い奴を紹介してやる。それでいいだろ。後はそいつをお前が口説き落とせばいいのだから変わらんし」

「やだ」

「何でだっ!？」

もうラーに押し付けてしまえ、とか思っていたのにきっぱりマナは拒否して来た。

「ロクでもないの紹介して厄介払いする気でしょ」

「自分でも厄介だという自覚はあるんだな——ではなくて! ロクでもないのとは何だ! ラフィリアークデイル・レヴァデア・ハインシュベルク。俺の兄だ」

「……兄弟の上だからって優秀とは限らないわ」

目を伏せ、ぽつんと呟いたマナの言葉は痛い心に満ちていた。

「何だ、お前、妹だか弟だかに負けてるのか」

「はつきり言うなあ」

いっそ清々しいソウルの直接的な言い様にマナは苦笑して——頷いた。

「うん、そう。私の家ではね、魔力が強いのが当たり前なの。そーゆー家系なんだ。でも判るんでしょ? 私、ほとんど魔力なんか持っていないんだ」

「成程な。自分に無い力を契約した奴で補おうという訳か。他人任せにも程がある。ヘドが出るわ」

マナの言葉に毛ほども同情せずにソウルはそう吐き捨てる。一瞬マナは怯んだ表情をしたが、すぐにきつと眉を吊り上げソウルを睨んだ。

「仕方ないじゃない！ 無い物はないんだもの！ 自分に自信たっぷりな貴方とは違うのよッ！」

「……っ」

マナの言葉にかつとソウルの頭は熱くなる。

（俺が。俺が——何もしないでここまで来たとしても？）

半端な生まれであるソウルは、王の血を引いているとはいえ常に周囲から蔑みの目を向けられてきた。庇ってくれる者など勿論いなかった。父である王も、母を愛してはいてもソウルに心は向けなかった。

自分を王家の汚点として、殺されそうになった事だって覚えていられる数じゃない。

その周囲の態度に、怯えが無かったとしても？

（ふざけるな！）

その周囲の者達に反発する様にソウルは生きて来た。

だからどうしたと。誰に遠慮もしない。自分を卑下する事もしない。ただ強く、強くと、自分を守る為にこうして来た。

「俺は他人任せに楽をする奴など大っ嫌いだ！ 魔力が強い家系？ それがどうした。魔力なんぞ無くてもどうとでもなるわ！！ ならないならどうとでもするのだ！！ それだけに価値を置くから何

も見えんのだ、馬鹿者め!!」

「仕方ないじゃない!! 価値なんか無いのよ!! 魔力が無くちや……何にもない……。皆がそう見るなら、仕方ないじゃない!」

「『皆』などそれこそどうでもいいであろうが!! 他の誰が何を言おうが、お前がお前の価値を信じればいいだけだっ!」

「……っ」

はっとしてマナは目を見開いた。ソウルの怒り方はただ気に食わないからという相手に向けるものではない事に、気が付いたから。

「……ごめん」

マナとて、その努力を惜しんできたつもりはない。魔力が無い代わりにと磨いた武技は、国の中では五指の指に入る程。

いつか、それをして自分を認めてくれるのではないかと――思っていた。

だが、駄目なのだ。

マナの家系で尊ばれるのは魔力だけで、他の何を持っても駄目なのだ。

「……いや」

マナの謝罪に少々ソウルも気が咎めた。マナが本当に何もしないなどと思った訳ではない。事実彼女は歴戦の魔術師ですら恐れて忌避するこの魔界へ、魔力をロクに持たない人の身で来たのだから。

ただ、弱かった自分を思い出してマナにぶつけてしまったただけだ。

「ソールスティーリツヒ、だったよね」

「……ああ」

「やっぱり私、貴方がいい。私と契約、してくれない？」
「……俺は」

マナに力を貸すのも、悪くはないかもしれない。ふとソウルはそう思った。

しかしそうなると今度は別の躊躇いが出来る。

（俺は、半端だ）

何を言おうと、どれだけ力があるうと——それは事実。

（俺と契約して、こいつの目的は果たされるのか？ より蔑まれるだけではないのか？）

「ねえ、ソール——……」

「ソウル！」

マナの再度の呼び掛けを遮る形で凜とした女の声が第一庭に響いて、あまり嬉しくないその声に慌ててソウルは声のした方を振り向いた。

「ル、ルクエール……ッ!？」

何故ここに、とソウルの表情がそのまま言っていた。王家に人間の血を混じらせたソウルの母をはっきり毛嫌いしているルクエールが訪れるはずの無い場所だというのに。

（とゆーかこいつ何でわざわざ俺を捜しに）

時間遡行の魔術で同じくらい消耗していたはずだというのに。まさかルクエールとの魔力にそんな開きがあってもう再戦しようとか

——イヤイヤ、そんなはずはない。

「ソウル、陛下が——……って待ちなさい。何、その女」

何処か慌てていたような様子はあつという間に消え去り、ルクエールはソウルの後ろに隠れていた、とは言ってもマナの方が背が高いので隠れきれてはいなかった彼女を見つけて、きつと睨み付けるとつかつかとそちらに歩み寄る。

「お前、人間ね」

「……そうよ」

ルクエールの露骨な嫌悪と侮蔑は、ストレートにマナへと伝わった。隠そうとしていないのだから当然だが。

マナの答えが終わるかどうかのうちに、ルクエールの手に短刀が生まれ無表情にそれを首を狙って突き付け——

ギン！

マナの首を裂く手前で、手の平に薄く張ったソウルの魔力に叩き折られた。

「何のつもり、ソウル」

「目の前で殺させるのが気に食わん程度には、俺がこいつを気に入っただけだ」

「ソウル……」

庇われた安堵と、何よりソウルの『気に入った』という発言に嬉

しそうにマナの表情は輝き、逆にルクエールの表情は怒りに歪む。

「私よりも人間の小娘を取るというの」

「当たり前だろーが！ 貴様選ぶよりゃなんぼもマシだ！」

「……ふ……」

「ふ？」

「ふふ……ッ。 ふふふふふ……っ」

絶句し、しばし沈黙したかと思えばルクエールは低く暗い声で笑い始めた。ソウルは全く気が付かなかったが、マナは確かにルクエールの声に傷付いた響きを感じ取ってはっとした表情になる。

「自分が誰のものなのか、しっかり調教してあげるわ!!」

「ふざけんな! 俺は俺のもの以外の何者でもないわ!!」

叫び、魔力を集中させ始めたルクエールに備えてソウルも構えようとして。

(うつ)

元々魔術を使える程の魔力はもう残っておらず、それはルクエールも同じようでそこはほっとしていたのだが、更にソウルの方には武器を生成する魔力すら絞り出せそうになかった。

「ふっ! どうやらまだ武器も作りだせないようね!」

「くっ」

(マズい、いくら何でも素手では——)

焦るソウルに構わずルクエールは地面を蹴る。むしろ絶好の好機と言える。

「ちっ!」

舌打ちをしてマナの手を取るとソウルはその場から逃げだした。

「逃げ切れるの？」

「知るか！」

「あの人の武器、何か特別だったりする？」

ソウルに手を引かれて走りながら、マナは後ろのルクエールを見ながらそう聞いて来た。

「アレはただ魔力が武器の形をしているだけだ。間接攻撃をして来るところを見るにどーやらあいつもそう余裕はなさそうだがな！」

「成程」

頷き、マナはぱっとソウルの手を振りほどく。ぎょっとして慌てて止まろうとして、体がつんのめったが、しかし何とか倒れるのは耐えて振り返る。

「おい、マナっ!？」

「ただの武器なら大丈夫」

すいと足に手をやって、スカートの内側から忍ばせていた剣を取り出す。流石にやや短めだが、短刀という程短くはない。

「どけ！ 人間！」

ソウルに対する時とは違う、本気でマナを殺す力を込めルクエールは槍を振り下ろす。

「ふっ！」

短く鋭い呼吸と共にマナはルクエールの槍を絶妙のタイミングで跳ね上げ、無防備になった懷に飛び込み足を掬って倒し、その上に

乗って首元に刃を当てて動きを封じた。

「くっ……」

「全然甘いわ。ちゃんと武術修めてるの？」

マナの剣は『技術』である。普段ルクエールは――というかソウルもだが、力任せに叩つ斬る、のが普通なのである。強大な力を持つ魔族故の戦い方だ。

「ちょっと寝ててね」

「うっ！」

鳩尾に拳を叩き込み、びくんとルクエールが痙攣して体から力が抜けたのを確認するとマナは馬乗りになっていたルクエールの上から立ち上がった。

「行こ」

「ってどこにだ」

マナに手を引かれうっかり歩き出してしまってから、手を振り払って隣に並びながらそう訊ねる。

「とりあえず彼女が起きる前にここから離れた方がいいでしょ？」

お父さんの所がいいんじゃないの？」

「親父の？ 何で」

ルクエールから離れるのは大賛成だが、父王の所に行くのは微妙に気が進まない。

「だってさっきの人、『陛下が』って言い掛けてたよ？」

そう、マナを見付けて目的がすり変わってしまったが、ルクエールは何やらソウルに用があったのだ。

「……親父か……」

「仲、あんまり良くないの？」

少々苦いソウルの声にマナはそう気遣わしげに訊ねて来た。

「良くはないな」

「そう」

「しかし行かん訳にもいくまい。俺が正当に王位継承権を取るまで親父に何かあったら困るしな」

「王位？」

ソウルが第二王子である事はマナも聞いた。順当に考えて兄だというラーが第一王位継承者なのだろうと判断する。訂正するのも説明するのも面倒なので特にソウルも何も言わない。

「ソールは王になりたいの？」

「……オイ、何でお前がソールとか呼んでんだ」

「さっきの人も呼んでたから。だ、ダメ？」

仲の悪そうなルクエールが許される呼び方だから、意外とフランクにオーケーだろうと思ったのだが、自信無さ気にマナはソウルの様子を窺った。

確かにソールステイリツヒという本名は長い。嫌いではないが。それと呼ぶ者はかなり少ない。

「まあ、いいが。ソールではなくソウルと呼べよ」

「ソウル？」

強調された『ウ』の音にマナは首を捻った。

「だってソールステイリッヒ、でしょ？」

「ソールよりソウル天空魂のがカッコ良いではないか！」

「……それだけ？」

脱力してそう確認したマナに何ら怯む事なくソウルは得意げに胸を張る。

「十分な理由であろう！」

「……そうだね……」

本人がそれが良いというなら良いのだろう。マナは同意して頷いた。

「でも律義にあの人も守ってたよねえ、ソウル」

「ルクエールか？」

「うん。もう少し優しくしてあげればいいのに。ソウルの事好きなんだよ」

「有り得んな」

下らん、と吐き捨ててソウルは取り着くシマも無くそっぽを向く。

「どうして」

「俺はあいつをガキの頃負かしてるんだ」

子供の頃、遊びがてらで賭け試合に参加した。魔族の中では珍しい事ではない。ちょっとした小遣い稼ぎにもなるし。

(半端の俺に負けたのが気に食わないんだろうさ)

それがきつかけなのだろう、事あるごとにちよっかいを掛けられてきた。時と共に多少手緩くはなってきたが、初めの頃はそれこそ本気で殺されかけたのも一回二回じゃない。

(こうして生き残っているのは、ルクエールよりも俺様の方が強いからに他ならん)

「子供の頃でしょ？ ……っていうか、ソウルは大人なの子供なの。魔族的に」

年齢は聞いたが、魔族における千と二百歳そこそこというのはどれぐらいなのだろうか。

「……き、貴様よりはずっと年上だ」

「うん、良く判った」

知識や知恵はどうか判らないが、精神的にはほぼ見た目通りで良さそうだ。

「何っか腹立つんだが貴様。……まあいい。俺はとりあえず親父の所に行つて来る。お前を連れてはいかんから適当にどこにでも行け」
「て、適当にって」

丸投げなソウルの言葉にマナはもう少し何か、と情けない表情になる。その顔を見てはあ、と一つ溜め息をつき。

「まだ居座る気なら俺の部屋を貸してやる」
「うん！」

ぱつと顔を輝かせたマナにソウルは再び溜め息一つ。

「お前、仮にも男の部屋に……まあ俺様は人間なんぞに興味はないがな」

明らかに男扱いされていないのが若干面白くないが、露骨に警戒されるのも本当にその気が無いので腹が立つ、という複雑な心境。

「付いて来い」

「うん」

真っ直ぐ自室のある第二邸へと戻った。二階丸々がソウルの部屋であり、この上の階にラーの部屋がある。自室の中の一つである客室にマナを通してからびしとソウルは彼女に指を突き付けた。

「いいか！ 勝手にウロチョロしたり人の私物に触れるなよ！」

「判ってる判ってる。——あ、ねえ」

笑って手を振ってソウルを見送ろうとしてふと気が付いたように呼び止めた。

「何だ」

「ソウル、さっきの——……いや、やっぱり後でいいや。行つてらっしゃい」

「？ 行つて来る」

多少気にはなったが元々ソウルは細かい事には拘らない性質だ。マナを残して父の私室へと向かう。

「……私の事嫌ってないなら契約してくれないかなあー……」

今言っても機嫌を損ね、部屋から追い出されると面倒なので言わなかった言葉を、見えなくなった相手に向けてぽつりとマナは呟いた。

第二章 襲撃開始

「遅かったな」

「煩い。ルクエールを迎えに来させる方が悪いのだ。それより――」

魔王の私室に入っすぐ、掛けられたラーの言葉に噛みついてからソウルは部屋の中へとぐりと目を向ける。

「別に迎えになんかやっちゃない。ソウルも呼んどくか、って言うたら勝手に行っただけだ」

「……お前、実は俺の嫌がる事を楽しんでるだろ？」

微かに笑ったラーの瞳に宿っているのは、あまり性質の良くない笑い。ソウルの言葉への肯定だ。

そして次に姿を見せたのは三十から四十の間ぐらいの、見るからに高価な衣装で自分を飾った女性だった。もっともその衣装に負けなだけの華やかさを彼女自身も持ち合わせていたが。

彼女は部屋に居るソウルを見るなり、はつきりと眉間にしわを寄せる。

「全く……ッ！ 王の御前に姿を見せるとは何と図々しい！ 半端なお前が誰の許しを得てこの場に立っているのです」

「俺が呼んだ。文句があるか？ 母上」

ソウルが何を言うよりも早く、常の彼にはあり得ない意図した冷やかな声音で、ラーはそう己の母親に声を掛けた。

途端びく、と第二妃シュツイルオーレは体を震わせ何とか唇に笑みを作る。

「ラ、ラー……。い、いえ、母はそのような……。お前が望むなら、別に……」

ラーの態度も冷ややかだが、シュツイルオーレの態度も必要以上におどおどとおかしい。

——いつ見てもこの親子の関係には違和感を覚える。

「それで、親父が一体どうしたと？」

「襲撃されたらしいな」

別にこのぎすぎすした空気を楽しむような趣味はないので、さっさと二人の空気を割ってラーに話しかけると、いつもと同じ、抑揚の無い口調でそう答えた。それにシュツイルオーレがホッとしたのに気が付いたが——まあ、どうでもいい。

「どこの誰にだ。つーか無事なのか？」

「逃げられた」

この場の誰よりも一段太い大人の男の声が静かに現れそう言った。

「ラー、ソウル。……ルクエールはどうした？」

自分の息子二人、そして自分の後を継ぐであろう姪の姿を探すが生憎今ここにはいない。

「陛下！　いかに陛下の姪とはいえルクエールは直系ではありませんせん！　やはり陛下の後は直系第一子であるラーが継ぐべきではありませんか！　であればルクエールはこの場において部外者のはず。気にする必要もありますまい」

自分の妻であるシュツイルオーレにふむ、と目を向けてから――
静かに王はラーへと視線を移した。

「どうだ、ラー。継ぐ気はあるか」

「無い」

「と、言う事だ、シュツイルオーレ」

迷わずきっぱり即答したラーに怒るでもなく呆れるでもなく、王はシュツイルオーレにそう言った。

「ソウルに継がせる気は無い。なればやる気も才も、ルクエールが最も妥当だと思うがな」

「っ……」

王自らの断言に、ソウルは歯を噛みしめやや視線を落とした。――
判っていた事だ。

「まあいい。それよりも本題に入ろう」

「わざわざ俺等と呼んだって事は親父個人を狙ったもんじゃないって事か？」

いやしくも魔王の座に就く男である。命を狙った襲撃の一つ二つで騒ぎたてはしない。

「さて――それは何とも判らんが。報復をするべきかどうか迷っている」

「すりゃいいだろうが」

「同族相手なら迷わんのだが、どうにも相手は人間でな」

「人間？ それはまた大それた事を」

ふんとソウルは鼻で笑った。確かに一時期、領地争いで魔族と人間の関係は最悪だった。しかし魔族が地下世界を自らの魔力で開拓して、こちらに住むようになってからは関係という関係はほぼなくなっている。

稀に人間の優れた魔術師達が強大な魔力を求めて契約を欲するが、その程度。

魔族にとって肉体も脆く魔力もさして持たない人間など本気で相手にする事も無い存在――

「しかし妙な話だ。人間が何故魔王を襲う」

領地争いをしていた頃は、それこそ人間の英雄が『勇者』と称えられ乗り込んで来たものだが、今ではあまりそういう事も無い。

――まあ、未だ『存在そのものが悪』と突っかって来る者がいないとは言わないが。

だがあくまでそれは特例。やや不審そうに呟いたラーにソウルも頷く。

「そもそも人間の侵入を見逃すとも思えんのにこの王城にまで入れているのが納得いかな」

マナのように魔力が無いような人間ならまだしも、その手の輩は大抵強い魔力を持っているか、少なくとも人間にしては優れていると言っている魔術師を連れている。

「そう。だから迷っているのだ」

「だが結局逃がしたんだろ？」

報復も何も相手が居ない、とラーは肩を竦めたが逆に王に笑われた。

「血の一滴、髪的一本もあれば十分だ。そうだろう、ラー」
「ふん」

本人の肉体の一部があれば、その波長を辿って本人まで辿り着く事が出来る。勿論距離と時間と探す者の力量に効果は大きく左右されるが。

「それを踏まえて――どう思う」
「面倒い。放っておけばいい」

王の再度の質問に真っ先に答えたのはラーだった。その内容にやる気がないが。
勿論返ってくる答えは判っていただろう、苦笑して王は頷きソウルへと続けて目を向ける。

「どうだ、ソウル」
「俺は気に食わんな！ 企んでいるのが何にせよ相応の報復はしてやるべきだ！」

水を向けられソウルは勢い良く言い切った。ソウルの性格上、売られたケンカはスルーしない。

「ふむ。シュツイルオーレ、お前は」
「人間如き、わざわざ騒ぎ立てる事もありますまい。己が格を下げるだけです」

「二対一だな」
「……」

少しだが、意外な気がした。シュツイルオーレの性格ならば、人

間如きに舐められてたまるかと報復を訴えるかと思ったが――

（どうせ俺が報復を求めたからだろ）

自分から正妃の地位を奪ったソウルの母を、そしてその子供であるソウルを嫌って――いや、憎んでいるから。

母が死んだ後も正妃の座は戻ってこなかった。その事がまたシュツイルオーレのプライドに障るのだろう。

「私は報復を行うべきだと思います、陛下。少なくとも放っておくべきではない。仮にも陛下の元まで侵入して来たのですから」

シュツイルオーレの言葉に王が頷いたその直後、扉を開けて入って来ると同時にルクエールはそう言った。

「ルクエール！」

もう気が付いたのかと、流石に少々バツが悪そうにソウルがその名を呼ぶと、ちらりと目をやり小さく呟く。

「後で覚えてらっしゃい」

当然ながら怒りの全く冷めていない眼でじろりとソウルを睨むと、すぐにルクエールは王へと目を戻した。

「これで二対二か」

「陛下のご意思は？」

おそらく奇数でケリが付けばそれで決定するつもりだったのだろう。しかし生憎ここにいる人数は偶数で、そして意見も綺麗に割れ

た。

最終意志決定者としてルクエールに仰がれると、ニィと凶悪に笑って王は断言した。

「では、正当なる報復を。――狙いが俺ならばその血に連なるお前達にも何か仕掛けてくるかもしれん。気をつけよ」

「ふん。人間如きに後れは取らんわ！」

血の中にその人間が宿るお前が何を――とシュツイルオーレの眼が言っていたが、無視をした。

「話は終わりだな。俺は戻る」

「なら俺も戻るかな」

(……マナの事も気に掛かるしな)

ラーに続いて広間から出た所で、ぐいと腕をルクエールに引かれて引き止められた。

「何だ。またやる気か？」

正直今日はもう勘弁してもらいたいが、勿論挑まれば受けて立つつもりで、弱気を隠してソウルは自信ありげに笑みを作って言った。

「それでもいいけれどその前に、一言ぐらい何もなければいいかしら」

「謝らんど」

「……お前は本当に可愛くないわね」

「結構だ」

ルクエールから腕を取り戻しふいと踵を返すと、その横にルクエールも並んで歩き出す。

「……………何だ。まだ何か用があるのか」

「あの娘はどうしたの」

「貴様の知った事ではあるまい」

「なくなどないわ。お前は私のものなのよ。——大体、人間などを相手にして周りに何を言われるか考えないの？」

マナを庇い部屋にまで招いた事を知られれば——言われるだろう、間違いなく。

それが煩わしくないとはいわない。だが。

「それがどうした。俺様がマナを気に入った。俺のしたい事をするのに誰に阿^{おもね}る事も無いわ」

「……ソウル」

（お前は本当に——強いのね）

それが発揮されているのが人間の小娘に、というのが気に食わないが、それでもやはりソウルのこの強さが、好きだ。

（……私には出来ない）

それが出来るのなら、ソウルを夫にと素直に望むだろう。

しかし怖くてルクエールにそれは出来ない。ハーフであるソウルへの反発を負うのが怖いのだ。

ソウルとの出会いは最悪だった。ソウルにとってもそうだろうが、ルクエールにとっても。

それまで同世代ではラーにしか負けた事など無かったのに（アレは別格なので戦えるとも思えない）、更に自分よりも年若いソウルに負けたというのが。人間の血を引いた恥さらしなど見たくもなかったからそれまでルクエールはソウルの顔を知らなかった。

悔しかったし腹立たしかった。半端なくせにそんな才を受け継いで生まれて来たソウルも、そんな半端に負けた自分も。

――殺してやろうと、本気で思った。喜ぶ者こそ居れ、悲しむ者など居るはずもない。

（そう思っていたのにね）

そしてそう思っていたのはルクエールだけではなくて、中にはルクエールが眉をひそめるような手段を取る者もいた。

だがそのどれにも、ソウルは屈しなかった。

それを生意気だ、と思わなくなったのはいつからだろうか。

「……」

無言になったルクエールにちらちらと視線を向けながらソウルはどうしたものかと困っていた。

（どこまで付いて来る気だ）

部屋まで来る気ならこのままではまずい。マナを見られたらまた

煩いに決まっている。

丁度注意は逸れているようなのでどこかに逸れてやり過ぎるか——と足を止めると、考え事をしているというのにルクエールはすぐに気が付いた。

「どうしたの？」

「そりゃ俺のセリフだ」

嫌だったが、波風立てるのを承知でそうソウルは口火を切る。このまま延々隣で歩き続けるよりはマシだ。

「何で貴様と並んで歩かにならんのだ」

「だから言ってるでしょう？ お前は私のものなのよ」

「ふざけんなっ！ いい加減に——っ！」

怒鳴りつけようと声を荒げ、不意にルクエールの背後を取った人影にはっと眼を見開く。

「ソウ」

「伏せろ！」

呼び掛けを遮りソウルはルクエールの体を押し倒す。そのルクエールの頭の上を魔力の塊が通り過ぎて事態を悟り、すぐさまルクエールは槍を創り出し当たりの気配を探り——

「無駄だ。逃げやがった」

「……そのようね」

更に慎重に辺りの魔力を探ってから、しかし反応は感じられずルクエールは頷いた。

「人間だったか？」

見てはいないが、つい先程魔王から忠告された事もあってソウルはもしかしたら同じ奴かもしれないと、その可能性をルクエールに訊ねる。

「判らないわね。――お前は怪我していない？」

「する訳無かろうが」

立ち上がり、つい先程そこに人影が居た場所を睨みソウルは笑う。

（面白い。何者か知らんが戦りがいありそうではないか）

今度もマナと同じく全く気配を悟らせずにここまできた相手だが、明らかにマナとは違う。確実に優れた魔力を持った強力な魔術師だ。城の結界に反応しなかったという事は結界師達よりも上の實力を持っているという事になる。

この目で見えるまでは信じられなかったが、それが事実だ。

「……ソウル」

「？」

元々ソウルは好戦的だ。遠慮なく戦えそうな相手の實力に期待して少し楽しくなっていた所に声を掛けられ我に返った。

「庇ってくれるのね」

「はあ？」

「庇ったんでしょう？ さっきのは」

——確かに庇った。咄嗟だったのでつい、というのものもあるが。

「それが何だ。人間如きに魔族が手傷を負わされるなど面白くないからな」

「……そう、有難う」

少々複雑そうに、しかし確かに笑みを浮かべてルクエールはそう言った。

「では次はお前を守ってやらないとね」

「いらんわ!」

「照れる事は無いでしょう。魔王に守られるなら恥ではなくてよ」
「お前はまだ魔王じゃなかるーが! つーか魔王になんのは俺だっ
つってんだろーが」

男だ女だと言うつもりはない。正直魔族において性別は強さに然程関わり無いからだ。自らの体に魔力を巡らせ防護、強化し敵を粉碎する――

つまりは魔力の高さと肉体のキャパシティが全て。そこに男女差は生まれない。ただし魔力を使わなければやはり肉体に男女の筋力の差は出るが。

「お前は魔王にはなれないわ」

「何を……っ」

かっとして振り向いて、そこにあったルクエールの表情にソウルは言葉を詰まらせた。

そこには揶揄や嘲りというようなものは無く、ただ――真剣に。

「私ならお前を裏切らず可愛がってあげるわ」

「必要無い」

だからソウルも手拍子で受けてのセリフではなく、きっぱり彼女の眼を見据えて言い切った。

「俺は俺の^{ちから}実力で居場所を作る。お前は俺に追い落とされる心配をしているがいい」

（……揺らがないのね）

ルクエールの手を取れば楽なのに、自分の望まない妥協は絶対にしない。

「今日は戻って寝る。用があるなら明日以降にしろ。お前も戻れ。人間相手に後れを取りたくないならな」

そう言って再び歩き出したソウルを、今度はルクエールは追ってこなかった。

（良かった……！）

自分に付いてこなかったルクエールにソウルは内心冷や汗を流しつつ安堵した。

上手く逃げられた。良かった。本っ当に良かった。

足早にその場を離れつつ自分の部屋のある第一邸へと向かう。呼ばない限り人も来ないから大丈夫だとは思うが。

「――マナ、いるか」

「あ、お帰りソウル」

先に言い付けた通りマナは大人しくソファに座って待っていたよ

う
だ
っ
た。
。

「どうだったの？」

「親父を襲ってきた奴がいるらしい」

「お父さんって、魔王だよね」

「ああ」

一国の王が易々と襲われた、という事にマナは驚くが、ソウルの表情は淡々としている。知っている情報だから驚いたり何だりがないのは当たり前だが、それでも怒りとか戸惑いとか、そう言う物がない事に首を捻る。

「よくある事なの？」

「いや、他所は知らんがハインシュベルクではあまり無いな」

「その割に落ち着いてるっていうか……。でもその様子じゃ無事だったんだよね？」

「当然だ。魔王だぞ」

ラーの件でもそうなように、最大の実力者がそのまま魔王になる訳ではないが勿論最低限、実力が無ければ認められない。

「良かった」

「……そうだな」

「でも魔王が襲われたって事はソウルも危ないんじゃないの？ 王子なんだし」

王族の血統。次代の王になるかもしれない者。マナの言葉には悪意なくそんな雰囲気滲む。

ソウル自身が王になる、的な事を口にしたので当然と言えば当然で

ある。

——実際は王を狙ったものならばソウルが襲われる心配はない訳だが。

（確証はないがアレが親父を襲ったのと同じ奴等ならば、ルクエー
ルを襲ったのもやはり『魔王』関連か……？）

「……ところでさ」

「うん？」

それはそれで魔王が無事だった事で話は一区切りと判断し、マナ
はおずおずと話題を切り替えて来た。

「こんな時に何だけど」

「何だ」

言い辛そうにしているから内容には予想が付いたが言わずに先を
促した。

「さっきの話——本当に私が嫌じゃないなら、契約して」

まずは調子に乗るな、とかそんなような事を言われると思ってい
た。実際ソウルはそれくらいの事は口にする。だが。

「俺は契約してやってもいい——が、先に言っておく。俺は半端だ
ぞ」

「半端？」

「純魔族じゃない。人間とのハーフだ。お前が『強い魔族』を求め
るなら俺は止めておいた方が良い。認めさせたいと思ってる奴等か
ら失笑を買うだけだ」

「え、それじゃあ」

父が魔王であるならば、そちらが人間の筈がないので。

「お母さんが？ そうなんだ……」

「そうなんだ。魔力で負けるつもりはないが、生まれはどうしようもない。何をしようと『それ』が無いから認められん。――お前と同じだ」

（同じ……そっか。やっぱりそうなんだ）

そうだろうと思っていた。ソウルの吐いた言葉の強さは本物だったから。

（それで、自分で頑張って来たから、怒ったんだね）

「どうする、マナ」

「――うん。やっぱりいい」

「……そうか」

「あ！ 違うよ！ ソウルがハーフだからとか、そういうんじゃないくて！」

どこことなく諦めたように頷いたソウルがネガティブな方向に考えている気がして慌ててマナは首と手を振って否定する。

「私、居心地を良くしたかったの。それに多分、強いソウルをダシにしようともしてた。あんた達が喚べもしないぐらい強い魔族と契約してやったぞって」

「判っている。そう利用して構わんといったんだ。……ナリが気に食わんか」

自分が威厳のある容姿をしていない事ぐらい自覚している。事実マナより背も低い。ラー程の容姿があればコンプレックスも持たな

いのだろうが。

「そうでもなくて。うん、やっぱり人の威を借るのは止めようかなって」

一族の誰も望めないような強い魔族と契約して、見返してやりたかった――けれど。

「それって凄く、情けないよね」

「そうか」

「うん。……ソウルは、強いよね」

「ふ、ふん！ 当然だ！」

てらいなく微笑んで言われたマナの言葉にかつと顔を熱くして、ソウルは慌てて居丈高に腕を組み取り繕う。取り繕えていないが。基本的にソウルは他人に認められる、という事をされた事がなかった。その才がもたらす結果は重宝されてもソウル自身には『この半端が』という眼が突き刺さる。

「……なら、お前はもう人間界に帰るのか？」

だから少しばかり、残念な気がした。――マナと二人でいるのは、心地良い。

「そうだね。留まる理由は無くなったし、帰ってちゃんと、自分で頑張らなきゃね」

「そうか」

そうして心を奮い立たせているならば、そのうちに帰った方が良い。いつでも一步目を踏み出す時が一番大変なのだから。

「ありがとう、ソウル」

「ああ。――送って行こう」

「え、大丈夫だよ」

来た時もこの魔王城にまで一人で来たのだし。まさかソウルからそんな事を言われるとは思っておらず、そちらに純粹に驚いた。

「いいから黙って送られろ」

「……うん。何か、照れるね。男の人に送ってもらうのとか初めて」

男の人、というよりも子という感じだが、そこはソウルを立てておく。

「そうか。光栄に思えよ。ハインシュベルクの王族に送られた人間の女などそうはいないぞ」

やはりマナからきっちり異性扱いされたのに気を良くしてソウルは鷹揚に頷くとマナと連れ立って城下に降りる。

「それで？ お前はどこから来たんだ」

行き来をする扉を繋げさえすれば、どこからでも通行可能だ。ただし勿論王城やその周囲など、いきなり出現されては困る場所には予め結界が張っており扉は作れないようになっている。

こちらの方は魔族同士も想定して頑健なので、まず破られる心配は無い。……なかったはずだ。残念ながら今はもう断言はできなくなってしまったが。

「正門から出て少し行って、東の方に森が見えるでしょ？ そこか

ら」

「ファーブの森か。あそこは植物系の魔物どもが巣くっているはずだが……よく無事に通りぬけて来たな」

魔族に比べると魔物は知能も魔力も低いのだが、それ故に話も通じずタチが悪かったりもする。

「息を潜めながらね」

「そうか」

嗅覚、視覚は流石にごまかせないだろうがマナの実力があればいくらかは気配を殺しやり過ごす事も出来るだろう。魔力探査には元々引っ掛からないのだし。

ソウルの質問に答えた事で話は終わりと判断しマナは行きは満足に見る余裕の無かった表通りの賑わいを楽しそうに覗いていく。

「流石魔界随一の大帝国。活気あるよね」

「当然だ」

自分の好きな物を褒められれば誰でも嬉しい。ソウルも勿論。心なしか応じる声も弾んで頷いて——ふと露店の中に細工物の店を見付けた。丁度女性が喜びそうな。

「マナ」

「ん？」

くんとマナの袖を引きソウルはその露店の前まで連れて行く。

「買ってやる。土産にな」

「え、いいの？」

町の露店で剥き出しで売っている様な小物だ。そう高い物ではない。ましてこの国の王族であるソウルがそう金銭面で不自由する訳もないのでそちらに『良いのか』と伺いを立てた訳ではない。

——純粹に、自分に贈り物をしてくれるのかと驚いて。

「ああ」

「じゃあソウルが選んでよ」

「はあ？」

言い出した方とは思えない声を上げ、ソウルとマナは互いに沈黙する。そしてしばらくして。

「……俺は人に物を選んだ事など無いぞ」

「ソウルが好きなので良いよ。ソウルと会った記念なもの」

「そ、そうか？」

自分で言った事ながら、まさかこんな事になるとは思っていなかったから照れる。陳列されている商品を見て——その中の一つを手にとった。花をモチーフに形作られた髪飾りだ。

「あ、可愛い」

マナの趣味ともそうはズレていないが、やっぱり可愛い系選ぶんだと何だかほのぼのとした気持ちになる。

「いいか？」

「うん」

マナが頷くとそのまま精算を済ませて渡そうとしてきたので、マ

ナは笑って自分の頭を指す。

「ね、ソウルが付けてよ」

「……嫌がらせか……？」

マナの髪に飾るには結構頑張って手を伸ばさなくてはならない。
疲れる、し、格好悪い。

「ちゃんと屈むって」

くすくすと笑ってマナは身を屈めた。飾りやすくはなったが、これはこれで屈辱である。

だが楽しそうなマナは結構可愛かったから、何も言わずに動きやすくするためだろう、飾り気なく後ろで一ヶ所、ゴムで束ねられている部分に留めた。

「似合う？」

「良く分らん。ルクエールに言わせると俺はセンスが無いそうだからな」

「あー、あの人にはそうかもね」

ソウルの趣味は可愛い系だ。ルクエールのシック&ハードが基本
コンセプトの服装の中では浮いて似合わないだろう。

「でもそんな話もするんだ」

「……。煩い。行くぞ」

「はい」

意外に嫌いでもないんじゃない？ とか口には出さずに表情でだけ言ってるマナはソウルの後について歩き出し――はっと頭上を振り仰ぐ。

「ソウル！」

「っ！」

魔力で気配を悟るよりも早く、マナはその殺気を感じ取った。剣を抜き魔力で作られた氷の飛礫^{つぶて}を薙ぎ払う。

「逃がすか！」

ルクエールが襲撃された時とは違い、継承権は無くとも王家の血を引いている事は引いているので今回ソウルは警戒を緩めてはいなかった。すぐさま襲撃者の後を追う。

当然の様にマナもソウルについて走る。――人混みが邪魔だ。

「見失っちゃわない？」

「一度捉えた魔力の感じを取違えるものか！ 舐めるな！」

ソウルが言い切った通り、人の壁に少々邪魔されはしたが視覚に見えなくなった相手も見失う事はなかった。

しかし追いながら、ソウルの胸に妙な既視感が生まれる。知っている気がする魔力なのだが、判らない。

（ここまで出かかっているのに思い出せん！）

物凄くもやもやする。だがそれも捕まえてしまえば全てが解決する事――

確実に差を詰めて来る相手を何とか撒こうとしたのか、細い路地に入った所で逆に人の壁が無くなって追い付いた。

「ふん。下らんミスをしたな。さあ、貴様の目的を吐いてもらおうか」

「ソウル！」

単純な追いかけっことなれば身体能力の差がまともに出る。途中で置いていかれたマナが合流して一瞬だけちらりとソウルがそちらへ視線をやると、狙って襲撃者が斬りかかって来た。

「ハッ！」

それで隙でも突いたつもりかとソウルは鼻で笑って手の平で刃を受け止めた。無論魔力でガードしているが。

「大丈夫？」

「当然だ。俺様が人間如きに後れを取るか」

そう、やはり襲撃者は人間だった。人と魔族では魔力の波長が違うので間違いない。

ちなみにそのカテゴリで分けるとソウルは完璧に魔族になる。

「さて――」

改めて襲撃者を尋問しようとしてソウルが呼び掛けると、じりと一歩身を引いて――唐突にその後ろに扉が出現し、その戸を開いた。

「何っ！」

まさか一瞬で扉を作り出せるわけではない。それなりの大掛かりな準備のいる召喚術の一種なのだ。時間で出現を設定されていたのか、隠されているのに気が付かなかったか、とにかく襲撃者は身を翻して扉へと駆け込もうとする。

「逃がすか！」

人間界に逃げられたら追えなくなる。追い駆ける事は出来るが、ソウルが人間界に現れたら無用な刺激を与える事になってしまうだろうから。振った大剣が微かに襲撃者の纏ったマントを引っかけ、フードが外れた。

「あ……っ！？」

「女ッ！？」

またかつ、と言うソウルの声と被せるように響いたマナの声は驚きに満ちていた。思わずソウルがそちらを見てしまうぐらい。襲撃して来た方の少女も忌々しそうに顔を歪めてから扉の中へと消え去った。

（……逃がした）

あれだけ近くで接触したのに逃がしてしまったのは屈辱ではある。だが。

「マナ」

「あ」

「今の、知り合いか」

「……うん」

とぼけられようとしてもあの態度で知り合いじゃない筈はないだろうと突っ込んでやる所だったが、マナは素直に頷いた。

「ユイリだった。……妹」

「何っ!？」

言われてようやくソウルは先程の既視感の正体に気が付いた。そうだ、マナに似ていたのだ。マナの方があんまりな魔力なので気が付くのが遅れたが。
言われてみれば、似ていた。

「どういう事だ。お前の一族は暗殺家業でもやっているのか？」

「そんな事してないけど……」

けれど間違いなく、ユイリはソウルを狙ってきた。

「あいつの魔力はルクエールを襲ってきた奴とも同じだった。偶然というにはあんまりだぞ」

「うん……」

偶然だ、などと往生際悪く認めないという事はしなかった。沈んだ声で頷いてから。

「……私、アルバトラズの一族なの」

「何っ!？」

ソウルの世代では直接的な関わりはないが、その名前には聞き覚

えがある。アルバトラズといえはかつての魔王討伐最盛期時代、勇者のパーティーに一人はいた魔術師の一族。

「私アルバトラズの当主の娘なの」

「……そうだったのか」

魔力が尊ばれる一族だと、マナは言った。確かにアルバトラズであればそうだろう。

まして当主の娘ともなれば当然強い魔力を期待されるはず。その一族の中で魔力を持たないマナの居辛さなど想像に難くない。

「うん。でも……どうしてアルバトラズが魔王を……」

「というより、どうやら魔王の血を引く者を、だな」

魔王関連だというのなら魔王本人とルクエール、そしてラーで事が済むはず。もっとも事情を知らなければ曲がりなりにも王の血を引いているソウル自身も可能性があると思われるでも無理ないだろうが。

しかしそれでも、理由が判らない。かつて敵対していた時ならまだしももう魔王を狙うような理由は無いではないか。

「それはとっ捕まえて吐かせればいいだけだ。また来れば、の話だな」

「あの、ソウル」

「……判っている。殺しはせん。俺はな」

——他の誰かに見付かった時は流石に保証はできないが。

「ありがとう」

「別にいい。それよりお前はさっさと帰れ」

「そうだね」

先程までとは少し事情が違う。マナには急いで帰る理由ができてしまった。

「ねえ、ソウル」

「何だ」

人間界へと通じる門を開き、マナは最後に、というようにソウルを振り返った。

「私、向こうで何でユイリが魔王を狙ってるのか調べてみる」

「余計な事はしない方が良くないんじゃないのか」

ただでさえマナは一族の中で立場が無いのだ。これ以上望んで煙たがられる様な事をする必要もないだろうと忠告する。

「うん、でも――」

納得できない、というのとは違う。正直マナにとっては魔王など他人よりもさらに遠い存在だ。伝え聞いただけならばどうでもいい部類に入る。

しかし魔王は、ソウルの父だ。

「もし、ソウルの家族が殺される前に止められたら……また会ってもいい?」

「ふん。人間などに殺されるわけがなかろう。大体お前に咎はない。」

いつでも来るがいい」

「私が会えないよ」

会えなくなるのは寂しいと、マナは少し悲しそうに笑った。少しだけ自分と同じ苦みを知っている、初めて出来た——友人。

「じゃあね、ソウル」

「ああ」

手を振り、門の奥へと入って——マナは帰った。しばらくすると門も消え、おそらく向こう側に無事辿り着いたのだと思われる。

「……さて」

自分も帰るか、とソウルはくるりと門のあった場所に背を向け歩き出す。

（しかし——……）

ユイリが襲ってきた時に殺してしまうと、マナに会えないのか。それは少し嫌だなと、マナの泣き顔を想像してしくりと胸が痛んだ。

第三章 父と従姉と兄の事

（父、ルクエール、そして俺……とくれば、次はラーだろう）

ラーはこのハインシュベルク最強の力の持ち主で、悔しいが自分やルクエールとは格が違う。おそらく父をも凌ぐだろうとソウルは思っている。

なのでソウルやルクエールの襲撃に失敗してなお、ラーに手を出して成功するはずが無いのだが。

（そんな情報を得ている訳もない）

性格上、ラーが力を振るう事は稀だ。例えどこかでその強大な力を伝え聞いたとしても、魔王を襲ったぐらいだ、来ない訳が無い。

（だから――）

襲撃者――ユイリを捕えるには、ラーの側にいた方がいい。

（とにかく目的が何か聞きださんと話にならん。それから人間が魔族を襲うなど無意味である事を判らせなければ）

いや正確には理解などされなくても構わないのだが。襲ってこなくなりさえすれば。

――という訳で、ソウルは早速ラーの部屋に入り浸っていた。

正確にはラーの側に、だが。

「……ソウル」

「何だ」

「今度は何だ？ ルクエールから逃げて来た感じじゃないが」
「気にするな」

人の部屋に居座って気にするなも何もないものだ。普通、他人が四六時中隣にいればいやでも気になる。もつともラーがその限りにない事も確かだが。

「護衛のつもりか？ まさか」

「お前にんなもん必要無かろう」

「そうだな。じゃ、お前は何でここにいる？」

「この舐めた真似をしてくれている奴に用があるだけだ」

ユイリを捕えたいのも勿論だし、ラーにユイリを殺させたくないというのもあった。

ソウル自身でなくてもソウルの血族が殺してしまってもやはり結果は同じだろう。

そしてラーなら、襲われた瞬間相手を瞬殺出来るし、する。

（もう一回ルクエールの方に行くかもしれないが……）

そちらに居座るのは自分が嫌なので。

「馬鹿な事をするもんだ」

「何？」

「人間に魔族が殺せるはずもない。馬鹿げた方法を取るもんだ」

魔物や、魔力の低い魔族までならばとにかく、ソウルも全く同感である――が。

「らしくないな」

ラーがそんな事を口にするのが、らしくないと思った。

「そうか？」

「ああ」

「俺の中ではそうでもないんだがな」

ラーは基本、感情の起伏が少なく、無感動だ。だが好きな事も嫌いな事も少ない分思い入れが深い。もしそれに引っ掛かったとラーが感じているのだとすれば確かに『それでもない』のだろう。

「つつーかお前『方法を取る』つつったか？」

「ああ、言ったな」

ユイリの襲撃だけに当てはめるには少々おかしい文法だ。それではまるで――

「後ろに何かいるって事か？」

「そう言ったな」

そして今の言い様からするならば。

「――魔族か？」

「そうだな、多分」

「誰だっ！？ つーかお前が判ってるって事は知ってる奴なのかつ！？」

勢い込んで身を乗り出しそう訊いて来たソウルにラーはつまらなさそうに鼻で笑った。

「自分で調べろ。俺にお前に教えてやる理由は無いだろ？」

「……そ、それはそうだが」

それぐらい——と思わなくはない。

（どこまでも怠惰な奴め！）

「お前は判ってて放置しておくつもりなのか？　鬱陶しくは無いのか」

「不快ではあるが、鬱陶しいって程じゃない。どう転ぼうが俺の知った事でもない」

「……そうか」

ラーは本気だ。自分も命を狙われているであろう一件にも何にもする気がないらしい。

（まあ、ラーの力を持ってすれば人間の刺客など物の数ではないという事か）

ソウルとてマナと知り合った後でなければ、彼女に好意さえ持っていないければ、襲ってきたら見つければ良いで済ませていただろう。それを考えればあながちラーが無気力だとは言えないのかもしれない。

「ソウル」

「何だ」

「襲撃者を待ってるならルクエールか親父の所、もしくは一人でいい方がい。俺の所にゃ来ないぞ」

「何？」

確信的な物言い。ソウルを追い出したいがため——という訳ではなさそうだ。

元々ラーはソウルが部屋にいる事を気にしないのだから、おそらく本当だろうが。

「……訳判らんぞお前」

教えてやる理由は無い、とか言いながら。

「俺の中では普通だがな」

本人が言うのだからそうなのだろうが。……理解不能だ。

「まあ、いい。確かに俺も狙われているようだから一人になるという選択肢はアリだと思うしな。……ラー」

ラーの心配はしていないから、別に一人にしても問題ない。だがラーに関して心配な事はある。

「何だ」

「もしお前の元に刺客が来ても、殺さんでいてくれるか」

ラーの実力があれば十分に叶う事。だがそうしてやる理由は無い事。

「ああ、構わないぜ」

手加減など面倒なだけだろう。だがあっさりとラーはそう頷いた。

「……頼んだ」

安請け合いだが信用する事にした。何よりラーの確信が正しければ彼の元には襲撃者は来ないとの事だし。

案外、そう思っているからあっさり頷いただけかもしれないが。

（しかし、魔族が人間を使ってたか）

何故わざわざそんな事を？

（発覚を恐れて、かもしれんな）

人間を使えばその背後に魔族がいるなどとは思われない。ラーに言われなければソウルとてそんな事など思いもしなかったし、ラーでなければ鼻で笑っていた。

（親父や俺達を殺して得をする者……。魔王の座を狙う誰かか、他国のどこかか。だがそれにしても腑に落ちん）

もし自国内で魔王の座を狙う誰かなら最有力候補のラーを放っておいては意味が無い。いかに自堕落なラーとはいえ、己の一族を殺して成り上がる魔王など認めまい。それぐらいなら自分が王の座につくだろう。

それにそれだと、そもそもソウルを狙う理由が無い。

（単純に気に食わんからか？ それだとルクエールが襲われたのが判らんしな……）

魔王は人間の女を娶ったから、という理由でソウル共々対象になるかもしれないが、ルクエールは純血だ。

女性の魔王就任も歴史の中で少なくないので、その辺の反発という

のも無しだ。

(……判らん)

ソウルも頭の出来は悪くないつもりだが、いやむしろ良いが、
ーの出来はやはり違うのだろう。

「——あ、ソウル！」

「げっ」

考え事をしていたので向こうの方に早く気付かれた。ここまで来て眼前で引き返すのは負ける様で嫌なのでそのまま進む。

「迎えに行こうと思ってたのよ」

「何か用か」

「襲われたそうね」

「ちッ」

ほんの昨日の事だというのに耳が早い。いかにも嫌そうな舌打ちをするソウルに、ルクエールは青筋を浮かべた。

「どういう意味かしら？」

「つーかだからどうした」

「そうね。お前が襲われたという事は王座狙いではなさそうね」

「どうだか。気に食わないから、というだけで俺を殺そうとする奴は少なくないからな」

ソウルに関しては目的と何ら関係無い、という事も有り得るのだ。

「どうかしら。お前を殺したい者達がいるのは否定しないけれど、目的があって企てを行っているのなら、その最中にそんな余計な事をするかしら？」

「……」

もったもだ。そんな事をするのは余程の馬鹿だなどソウルも心の中で頷く。あくまでも心の中でだけ。

「何にしても、無事で良かったわ」

「貴様俺を舐めてるのか？ 俺に負けた分際で」

純粋な心配に雑言で返って来た事に対しても勿論腹立たしかったが、それ以上にその内容はルクエールのプライドを傷つけるもので、自制の為に強く拳を握った。

「子供の頃の話よ」

「今でも変わらんわ」

「……どうかしら」

周りの空気が一段冷えた。ルクエールの纏う氷の魔力が濃くなったのだ。

「ふん。拮抗しているのは今だけだ。貴様と俺の外見を見る。既に貴様は成人近い。もうそう魔力の伸びは期待できん。所詮貴様と俺様ではキャパシティが違うのだ！」

魔族の外見年齢はその者の魔力量による。時を重ねるにつれ魔力は増え、その力に体が耐えられなくなった時に成長していく。つまりより強大な魔力を身に付けられる者ほど成長は緩やかだ。既に七千を数えるラーが未だ十七、八程度で千八百歳のルクエールとそう変わらない外見なのもその証。

「そうね。ハーフのお前が正しく魔族と同じなら、だけれども」
「っ……」

それが唯一の不安材料だ。例が少ないだけに、いつどうなるか知れない身。ぎ、と唇を噛んでソウルはルクエールを睨みつける。

(……別に喧嘩をしに来た訳ではないのだけれど)

挑発に乗ったのはこちらだが、今日はそんな気分にはならない。魔力を収めるとソウルが意外そうな顔をした。

「私はお前を気に入っている、と言っているわよね」

「俺はお前なんぞ大嫌いだ」

「……知ってるわ」

第一印象は何でもなかったろうが、その後がまずかった。ルクエールもそれは認める。

好かれるような事はしてこなかった。出来なかった。

——恐かったから。

「どうしてお前は半端なのかしらね」

「俺様のが聞きたいわ」

「そう言えばあの人間の女、どうしたの」

どちらかと言えば、ルクエールにとってはこちらが本題。妙にソウルがマナを気に入っていたらしい所が気に掛かっていて、その所在を訊ねた。

まさかと思うのだが、ソウルは生まれと育ちもあって体制に反する事を厭わない。もしかしたら――

「とっくに帰ったぞ」

「そう」

さらりと答えたソウルに嘘は見えなかった。あまり嘘をつくのは
上手くない男だから、本当だろう。
――ほっとした。

「人間が一体何をしに来ていたのかしらね」
「……」

マナの目的を、勿論ソウルは知っている。しかしそれをルクエー
ルに言っていていいものかどうか。いやそもそも別に言う必要はあるま
い。

……馬鹿にされる気がする。自分が契約に応じてもいいと思ってい
た事も含めて。

「ソウル？」

しかしソウルの沈黙はルクエールに不審を与えた。呼び掛けられ
はたと気が付いて。

「珍しいではないか。お前が人間に興味を持つとは」
「興味など無いわ。お前が構っていたという以上のものはね」

言い方は過去系だ。マナが帰った以上、終わった事として済ませ
て当然だ。

「ガキの頃の事をネチネチと……。いい加減貴様も大人になれ。そ
もそも俺が気に食わんからと言って俺が好いたものを壊そうとはど
ーゆー考え方だ」

「子供なのはお前でしょう？」
「何をッ!？」

呆れて息をついたルクエールにソウルは素直に噛みついた。この素直さも、嫌いではなく。

「私はお前が気に入っている、と言っているのよ」

好きだ、とは言えないのは――自分の弱さ。

「う、嘘こけ。気に入っている相手を殺そうとするか？」

「いつの話をしているのよ」

言われてソウルは言葉に詰まった。ルクエールの仕掛けてくるものの質が変わっていたのは判っていたから。

「気に入らなかったのは本当よ。自分に勝った相手がよりにもよって半端だったんだから」

「やはりそうではないか」

「――気に入らなかった……、と言っているの。私は」

「……っ」

流石に言われている意味が判ってソウルは戸惑って息を飲む。ルクエールの眼が泣きそうだったから。

初めて見た。泣く事なんか無い女だと思っていた。女らしい可憐さや清楚さや繊細さなど見た事も無かったし。

――いや。

見てなど、来なかったし。

「……じゃあ、お前本気で俺を愛人にしようとしてたのか？」

愛人に本気というのは変な表現だが、ソウルとて自分が王座に望まれない事など十分承知している。判っていて狙う決意をした訳だ

が。

ソウルの言っている『本気』とは裏も表も無く、という意味でだ。

「……そう言ってるでしょう」

「……俺の意思は無視かい」

「だってどうせ頷かないでしょう？ プライドの高い男だものね」
(男、か)

そうか本当にそう見てたのか。それは――嬉しくない訳ではない。己のキャパシティの証明ではあるが、幼い容姿を気にしていない訳でもないし、自分を認めてくれる存在は本当に少ないから。

「それとも、大人しく納まってくれるのかしら？」

「悪いがごめんだ。大体俺は女の下に敷かれるのは好きではない」

「じゃあやっぱり、仕方ないわね」

「……まあ、そうだな」

愛人など絶対ごめんだ。ルクエールの気持ちちが本物でも。彼女がどうしても諦めないのであればソウルの方向性も変わる事は無い。

「まあそれも全て片付いた後の話、ね。今のままではちよろちよろ鬱陶しくて仕方ないもの」

「それは同感だ」

自分を嫌っている訳ではない相手に構える必要はない。格段に態度を軟化させたソウルにルクエールは微笑する。

「っ」

綺麗に、嬉しそうに笑うその表情が何故かぐらいはソウルにも判

る。人に聞けば間違いなく『美人だ』と返って来るであろうルクエールを初めて女として——可愛い、と思った。

（いや！ 断じてそんなのとは別物だしなッ！）
「ソウル？」

微かに頬を染めたソウルにルクエールの方が首を傾げた。自覚は無い。というよりもきつと意識してやったものでもないだろうし、そもそもソウルが自分を意識するとも思っていないのだ。

「ラー、ラーに言わせると糸を引いているのは魔族らしい」
「何ですって？」

もう別に、あらゆる部分でルクエルに意地を張る、という事はしなくていい。譲れない所は勿論譲れないが、共有した方が良い情報共有すべきだ。

ソウル同様ルクエルにとっても考えの外の事だったか、とにかく話を変える事には成功して、ほっとした。——かなり。

「魔族が人間を使っているというの？ そんなプライドの無い真似を？」

「ラーが言ったのでなければな」

「……そうね」

何を馬鹿な事を、と切り捨てられないのはルクエルも同じ。

「知っている相手、かしらね」

「だろうな」

辿り着く発想もやはりソウルと同じ。

「心当たりはあるか？」

「いいえ。考えてもなかった事だから。それに向こうが知っているからと言って私達が知っているとも限らないし」

「……それはそうか」

何しろ狙われているのは王族である。国民は勿論、他国の者だっ

て知っている者は知っている。

「何しても、次に来た奴は必ず捕まえてやる」

「ええ。そうそう逃げられるのも面白くないものね」

襲撃しても軽々と逃げられるとか、そんな話が流れては沽券に関わる。それは勿論だが、ルクエールに関しては、心配事がもう一つ。

（こいつは、殺すな？）

自分を襲ってきた相手は躊躇いなく殺すだろう。それを咎めるつもりはない。ソウルとてそうする。普段ならば。
しかし今回に限っては、それは困る。

（つつてもこいつは理由を言っても頷きやしないだろうし）

理由を知ったら尚更だろう。ソウルがマナと会う事そのものが、ルクエールにとって面白くないのだから。

そこまで思い至った訳ではないが、ルクエールの性格上人間に手加減するとは思えなかったので。

「……ルクエール」

「何？」

「この件が片付くまで俺と共にいろ」

「――え？」

思ってもいなかったソウルからの提案にルクエールは呆けたような返事を返す。

「そ……それは、私は構わないけれど、お前、どうして？」

「う、嫌いッ！ いいからお前は俺というッ！」
「――はい」

頬を染め、こくんとルクエールは頷いた。

理由など言えるはずも無いので怒鳴っただけだったのにと、ルクエールの素直さに違和感を覚える――が、都合は良いのでスルーした。

（後は親父か）

シュツイルオーレは事実上の王妃であり、若干狙いに掛かる気がしなくないが、彼女を抑える術はないのでユイリが彼女の元に行かない事を祈るばかりだ。ラーが彼女の名前を出してこなかったのにも彼女を避ける事の後押しとなっている。

「ルクエール、お前先に俺の部屋に行つてろ」

「部屋、に？」

「その方が色々都合もいいからな。俺は少しやる事があるから後で行く」

「……ええ、判ったわ」

薄く微笑しルクエールは頷いた。仄かに顔が赤い。

そのルクエールと別れてソウルはそのまま魔王の私室へと向かう。

（シュツイルオーレがいなきやいいんだが）

現在の魔王の妻の中で、一番位が高いのがシュツイルオーレなのだからいてもおかしくはないが、あの女がいると話どころではないのでそう願っておく。

「親父、入るぞ」

扉を叩いて中に入ると、運のいい事に魔王がいた。そして更にシユツイルオーレはいない。

(良し!)

「どうした、ソウル」

「……一つ親父に頼みがある」

「珍しいな。何だ」

「……お、親父はどう考えている」

いざ言おうとすると中々に言い辛くて、用意していたはずの物ではない言葉が口を突いた。ラーやルクエールとは気安さが違う。

「何をだ？」

しかし寸前ですり替えられ、核心から逸れたソウルの言葉にも魔王は気にせず先を促した。

「今回の事についてだ。親父も実は犯人に当たりが付いているんじゃないのか」

「も、という事は、ラーか」

「そうだ」

「あれは出来が違うからな」

くつくつと楽しそうに笑って魔王はそんな答えを返した。

「……判らんのか」

「残念ながらな。王はただの国の頂点。その他は何らお前等と変わらないのだよ、ソウル」

長く生きている分、様々な事が出来るようになる。経験も増え、突発的な出来事にも強くなっていく。
だが――それだけだ。

「……何で母さんを、その、アレしたんだ。シュツイルオーレがいたのに」

「いかがわしいな」

「やかましいわっ！」

ソウルの言い様に吹き出し、肩を震わせる魔王を怒鳴りつける。
怒鳴りながらも顔が赤いのは流石にソウルも恥ずかしかったからだ。

「惚れたからだ。それ以外に理由はない。愛した女との子供だ、お前も可愛く思っている。残念ながらあまりあいつには似ていないが――いや、そうでもないのか」

「嘘こけ」

子供の頃から魔王に可愛がられた記憶は無かった。いや、勿論可愛がって欲しかったなどと、そんな女々しい事は言わないが！

「そうだな」

可愛く思っている、などと言いながらあっさり魔王はそう肯定した。その態度に腹の中がムカムカする。

判りやすいソウルのその感情にふっと魔王は薄く笑う。

「俺はお前の安らぎの場とはならなかった」

「別にそんなもん期待しちゃない」

「そうだ」

だからこそ、今ソウルはラーと良好でいられるのだ。

「俺はもうそう長くない」

「……何？」

「魔力が衰えていくのが自分で判る。老いも進んで来た」

今の魔王の外見は四十の半ばぐらいだろうか。言われてみれば確かに随分年を取った。

「ソウル、ルクエールの力になれ」

「なっ、何だとッ」

まさか魔王からそんな事を言われるとは思わなかった。狼狽するソウルに魔王は至極真剣な様子で言葉を続けた。

「ルクエールなら最後までお前を守ってくれるだろう」

「ふ——、ふざけるなッ！ 俺は誰に守ってもらっても必要も無いわッ

！」

「いいや。お前には必要だ」

確信した物言いにソウルの心臓はどくりと鳴る。当たり前だ。こうきっぱりと言われて不安にならない者がいるものか。

ましてソウルは——自分に対して、自信の基盤となる物が欠如しているのだから。

「俺が……俺が弱いとでも言いたいのかッ！」

「そうだ。お前は脆い」

「ふざけんなッ！」

ばんッ、と机を叩いて立ち上がり、息荒く魔王を睨みつける。全

く揺らがない瞳が静かに見返して来るだけでソウルは舌打ちをして席に着く。

そうだ、別にこんな事をしに来た訳じゃない。

「頼みがあると言っていたな」

ソウルがその話にもう聞く耳を持たないであろう事を察して魔王の方から話を戻した。

「……ああ」

「何だ」

気まずい。しかし言っておかないで手遅れになるものは嫌だ。

「今後も襲撃は続くだろう」

「そうだな」

「襲撃して来た人間を殺さずにおいて欲しい」

「何故だ」

馬鹿な事をと一蹴される事は無かったが、代わりに当然の疑問を問返された。

「頼む」

「自分を襲う相手を見逃せと言われているのだ。理由ぐらいは話すのが筋だろう」

「……」

「ソウル」

促され、ソウルは嘘をつくべきか正直に言うべきか諦めるべきかを迷った。

嘘をついても魔王はそれぐらい見抜いて来るだろう。そもそもそんな都合の良い嘘など思い付かないし、用意もしてこなかった。大体、好きではない。

（構うか）

ソウルがマナに何を想おうと、魔王にだけは咎められるいわれは無いのだ。

「そいつは俺の友人の家族だ。だから殺してやりたくない」

「人間か」

「……そうだ」

「全く……いつの間に」

ふうと溜め息をついて苦笑いをする魔王には、やはり怒りや何かといった感情は見えなかった。黙ってその先の答えを待つ。

「周りに知られたら、何を言われるか判っているのか？」

「煩い」

「賛成はせん……が、まあいいだろう。無闇に他人に知られるなよ」
「……ああ」

忠告は付いてきたが、思ったより渋い顔もされずにあっさり頷かれた。

（ともあれこれで、襲われそうな所は回った訳だな）

後はユイリを待つて捕え、黒幕を吐かせればいい。ラーの言う通り同じ魔族であるのなら報復は当然で遠慮もいらぬ。

ルクエールを待たせている自室へ戻るべく、ソウルが席を立つ——と同時に扉が開いてシュツイルオーレが入って来た。

（げッ）

「……汚らしい」

眉をひそめて吐き捨てるシュツイルオーレの横を、無視してさっさと通り過ぎた。最後に会ってしまったのは不快だが、まあ運は良かった。用件は全て済んでいる。

不快な物はさっさと忘れる事にして部屋へと急ぐ。この間にもルクエールが襲われ返り討ちにしていたらと思うと気が急いで仕方ない。それでも騒ぎは起こっていないから、今のところは何も無いのだろう。ルクエールが手加減する訳が無いから、彼女が魔術を使えば相当の騒ぎになる。

「——入るぞ」

自分の部屋に入るのに声を掛けるのも不思議な感じだが、中には一応女がいるので。

「お帰りのさい、ソウル」

「ああ」

「何の用だったの？」

「つまらん用だ。何でもない」
「……そう」

当然気にはなっているようだが顔に出しただけで問い質すのは諦めた。

「……まあ、いいわ。それより——私、何もしないで時間を潰せるほど暇ではないのだけれど」

「黙ってついてきといて何を言うか。この件が終わるまでだ」

「……それが判らないのよね」

誘われた時点で気が付くべきだったが、正直舞い上がっていて気にもしなかったのだ。しかしルクエールからしてみればやはり色々おかしい事だらけで。

「……私が人間如きに後れを取っている訳ではないわよね？」

想われているとしたら大層屈辱だ。

「ああ」

「何故一緒に居ろなどと言ったの？」

「……っ」

どう答えたものか、言葉を詰まらせうろたえたソウルをきつく見詰めていた目をふっとルクエールは緩めた。

その表情を保つのに耐えられなくなったかのように、代わりに浮かんだのはどこか諦めたような悲しげな表情。

「どうせ心配してくれたわけではないんでしょう？」
「っ」

言われてようやくソウルは彼女に酷い事をしたのだと気が付いた。好きだと言ってくる彼女に対して無駄に期待させるような真似を。

（いやでも！　どう言えつつーんだッ！）

「ソウ……っ！」

「っ！」

更に問い詰めようとしたルクエールだが、ヴ、とすぐ近くに発生した魔力の歪みに二人揃ってはっとする。人間界と魔界を繋ぐ門の出現だ。

「来たわね……っ！」

「待て、ルクエール！」

ニィと凶悪な笑みを浮かべて駆けるルクエールを追って、慌ててソウルも走り出す。まずは黒幕を吐かせるのが目的だからいきなり殺しはしないだろうが、障害が残るような傷もまずい。

（だが何故城の中で門が……ッ？）

嚴重に張られた結界を破って門を開くとは、人間業ではない。いや、正直魔族でも――ソウルであっても難しい。黒幕である魔族が囁んでいるとしても、結界を熟知した者でなければどうにもなるまい。

だがつまりはそういう事で、それだけの実力者が糸を引いているという事だ。

ソウルとルクエールが歪みの中心に辿り着いた時、丁度扉を抜けて一人の少女が現れた所だった。そしてその少女の姿は。

「――マナッ？」

思わず口を突いて出たソウルの言葉に少女は振り返った。その顔を正面から見て違う、と気が付いた。ユイリの方だ。

「気に喰わない顔なこと！」

すでに帰っているとはいえ、ルクエールにとってマナの存在は面白くないものだ。昨日一日ゆっくり休み、今は魔力も万全だ。

「待て！」

「判っているわ、殺しはしない！」

「違っ……違わんが、ちよっと待て――ッ！」

もうソウルの言葉には耳を貸さず、ルクエールは槍を作り出しはるか間合いの外から一薙ぎした。

その難いだ風圧が空を切り、衝撃波という形になってユイリへと向かう。

氷の魔力の乗ったその衝撃波に掠った木々が一瞬で凍りつき、内側から四散する。とても『殺す気が無い』威力とは思えない。

「フレイシール！」

持っていた杖を構えユイリは自分の周りに結界を張る。ルクエールの魔力と拮抗し、刹那の攻防の後衝撃波を散らす――が、その時にはもうルクエールの間合いの中。何をする時間もありはしない。

「っ！」

息を飲み、何も出来ないままただ杖を抱えて身を引いたユイリの

前にソウルが立ち塞がり、ルクエールの槍を受け止めた。

「ソウル！」

叫んだルクエールの声には戸惑いと、何より非難が色濃く出ていた。

「……っ？」

驚いたのはユイリも同じだ。訳が判らず、自分がどう動くべきかを迷ってソウルの背中の後ろで固まっている。

「どういうつもり？」

「お前が斬ったら一撃で死ぬだろうが！　つか殺す気だったろ貴様！」

「気に入らない顔だったからね」

あっさりそう認めてルクエールは槍を肩に担ぐ。危なかった。

「おい、貴様」

ルクエールがとりあえず矛を納めたので、ソウルは改めてユイリへと向き直る。するととはとして杖を強く握り締めて一步下がる――が、攻撃はしてこなかった。

「正直に答えればこのまま帰してやる。貴様に俺達の暗殺を頼んだのは誰だ」

「……っ……」

「素直に喋る訳が無いでしょう。お前は何だかんだ言って女に甘いものね。私に渡しなさい。一日で吐かせてやるわ」

「待たんか！」

物騒な事を言うルクエールを慌てて止める。そんな事をさせたら一緒に居た意味が無い。

「何故？」

「……寝覚めが悪い」

「報復を言い出したのは元々お前でしょう？ 何を言ってるの」

ソウルは確かに女性に甘い所があるが、戦いとなれば全く別である。『敵』である者に男だ女だなど関係無く、敵には容赦など無い。だとすれば。

「……。お前、こういうのが好みだったの？」

あと手加減をしそうな理由といえ、それぐらいかと思って言ったセリフ。

「馬っ、馬鹿者！ そんな訳あるかッ！」

「じゃあ何だというのっ！ あの小娘にしてもこの小娘にしても、色々足りない事この上ないでしょう！」

ぐっと反らして強調されたルクエールの胸が弾んで揺れる。うつと顔を強張らせソウルはじりと身を引いた。

「だ、だから違うといっとろーが！ 大体俺はな、女らしい女が好きなのだ！ その点で言えばお前もマナも俺の好みからは程遠いわ！」

「失礼な！ 私のどこが女としての魅力が無いとっ？ 見せてやりましょうか？」

「そーゆー所がだアアア！」

服に手を掛けたルクエールに顔を赤くして思い切り首を左右に振りソウルは後ずさる。体の話などしていないというのだ。

「……マナ？」

ソウルの叫んだ名前に反応し、ユイリはぽつりと呟いた。声は決して大きくはなかったが、その一言を境にしんと当たりは水を打ったように静まり返った。

それはその一言に、ただならぬ悪意が含まれていたから。

「……そうか。あんたあの時の魔族か」

ユイリの言葉に、どういう事だとちらりとルクエールはソウルを見る。途端うろたえて眼が泳ぎ知っていたのだと良く判った。この反応で知らなかったという事もないだろう。

（だから私と共に？）

放っておけば自分がユイリを殺す事など容易く想像出来る。だとしたらソウルと一緒にいると言ったのも、ただこの女を守るためで――
そして既にソウルがユイリと接触しているのならば。

「ソウル。お前何か知っているんじゃない？ 私に言っていない事を」

「ふ、ふん！ 何も全てを共有する必要は元々ないはずだ。俺が何を知っているように知らせまいと、とやかく言われる筋合いは無い！」
「お前……ッ」

流石にバツは悪そうだったが、内容に対する反省は無い。握った

拳が屈辱と憤りにぶるぶると震えた。

（よりによって人間などに——ッ！）

「ル、ルクエー、ル？」

「ソウル。お前にはやはり調教が必要だわ」

暗殺騒ぎの中心に近付けるであろうユイリが存在も、今のルクエールには取るに足りないもの。逃がそうが巻き込まれて死のうがどうでもいい。大体人間などを使って襲ってくる段階で、もう相手が矮小な輩だというのは知れている。

「お前は私のもののなのよ！」

「違うっつとろーがッ！ あッ！」

ソウルとルクエールの構えが本格的になると、さっとユイリはその場から駆け出した。当然といえば当然だ。

「おい！ 逃げられるだろうがッ！」

「構わないわよッ！」

怒鳴るソウルにそのままルクエールも怒鳴り返して来る。その態度がイライラした。

「貴様、いい加減にしろよッ！ 例えそれで俺がお前に服従して、満足か！」

もし自分がルクエールの立場であれば、そんな形は望まない。自分が好きな相手には、笑っていて欲しい。笑ってもらえる世界を守ってやりたいし、そして何より、自分を好きになって欲しい。

「満足な訳ないでしょう！」

ルクエールとて判っている。判っていて——そう言っている。

「私はお前のようににはなれないわッ」

「……ルクエール」

「それでも、私は……」

「……悪かった」

「……いいえ」

ふ、と息を吐いてルクエールは槍を下ろし、魔力を収めた。

『ルクエールの力になれ』ふとそう言った父の言葉を思い出す。父はルクエールの自分への想いを知っていたのだろうか。だからあんな事を言ったのか。

確かに——魔王となるルクエールと共にいれば、安泰だろう。例えこの先どうなっても彼女は決してソウルがハーフだから、という理由で無意味に迫害はしてこないだろうから。

まして父の言うように、ルクエールの望むように『愛人』という枠に収まり彼女を愛せれば。

(……冗談じゃないッ)

ルクエールへの苦手意識は嫌いと言うまでのものではなくなったが、そもそも女に守ってもらうなど、そんな生き方は御免だ。

いや、女でなくても他の誰かの恩恵で生きていくなどソウルのプライドが許さない。

「お前は一体どうしたいの？」

「黒幕を吐かせ制裁を加える。それだけだ」

「それだけ、ね」

言うだけならその通りだ。しかしソウルの言葉の意味を判っている今では溜め息が一緒に出る。

「黒幕だけを――ね」

「……そうだ」

「お前、あの小娘と関わりがあるのを知っていたわね」

「……ああ」

誤魔化して誤魔化しきれるものではないだろう。ユイリとマナの顔立ちは明らかに姉妹だろうと判るぐらいには似ているし、不自然なソウルの態度にもそれできっちり説明が付いてしまうので。

「……あの女の、何が良いというの？」

『人間』というくくりを無しにした『マナ』という女に対しての、女としての嫉妬。

「馬っ、話を飛躍させるなっ」

少なからず、マナを女として見ていないとは言わない、勿論。しかしルクエールが言うほどはつきり意識はしていなかった。

正直――その手の感情はまだよく判らないのだ。

マナの事は結構好きだが、同士としての情の方が深い。いっても友人、ぐらいだろう。

「マナは俺と同じだからだ。それに煩わしい事を考えなくて済む。関係の無い人間だからな」

「同じ？ お前と？」

関係無い、の辺りは判る。ソウルがハーフであろうと純血だろうと、人間であるマナにはそれこそ関係がないからだ。それはソウルにとって確かに気楽だろう。

「あいつの一族はアルバトラズだ」

「アルバトラズ……って昔人間達のパーティーに必ず一人はいた、あの？」

「ああ」

「ふうん……そう。まだ続いているの。珍しいわね」

ルクエールの感想を聞いて、そう言えばそうだと言われてから気が付いた。ソウル達にとっては数百年も人生の一部だが、人間にとってはかなり長い時間。

英雄の血族だってパタパタ絶えて行く中で珍しいと言っているだろう。だからこそ——無駄な所にまでプライドが高いのだろうと、そうマ

ナへと同情する。

「けれどそれならあの小娘に聞けば判るのではなくて？」

「マナは何も知らん。お前も感じただろ、マナには魔力が無い。アルバトラズには不要な人材だ」

例え当主の娘であっても——

「そう」

その答えにルクエールは納得して頷いた。マナの一族での立場がどうだろうが、ルクエールには興味の無い事だが。

「それでお前と『同じ』なのね」

「そうだ」

そんな事で、という思いがルクエールの中に浮かんだが、寸での所で口には出さずに飲み込んだ。その程度の事ですら特別になってしまいう程、ソウルにとっては根深い劣等感になっているのだ。乗り越えた訳ではない。気にしないほど無神経でもない。ただ負けない為に強くなろうと、強がっているだけ。

（私なら）

そんな傷を負っている事も忘れるぐらい、守ってみせる。いや、そうしなければならぬ。

それ以上の感情を与えられなければ、きっと自分に彼と付き合う資格は無い。その傷をまた一つ深くしてしまった自分だからと、そう――思った。

「とにかく、俺はあいつを追う。これ以上舐めた真似をされたくないのも本当だからな。……お前はこうする」

「行くわ」

「……」

ルクエールが行くという選択肢を取ると予想していたのかしかなかったか、どちらにしてもソウルは微妙な表情をした。ユイリを追うのに側にいられるのも嫌だが、やはり放っておくのも心配だという所か。

「心配しなくても、もう殺そうとはしないわ」

「……何故だ」

「とりあえず、お前があの小娘を庇うのが恋愛感情ではないと納得したからよ。心を慰める為だというなら、まあ許してやらなくはな

いわ」

「何でエラソーなんだオイ」

ルクエールの言い様は面白くないが、言われた内容自体は少し、嬉しかった。

ルクエールの譲歩はただ自分の為にだったから。

「ルクエール」

「何」

「すまん。……ありがとう」

「っ」

かあ、とそれだけで頬が熱くなり単純な自分が恥ずかしい。

（仕方ないじゃない）

ソウルとこうして話す事自体稀だったのだから。まして謝られるなんて。礼を言われるなんて。

——笑ってくれるなんて。

「行くぞ」

「ええ」

（——ん）

覚えのある魔力を感じて、ラーは何を見るでもなくぼんやり外を眺めていた目を部屋へと戻した。

以前に感じたものよりも多少強い魔力を持っているようだが、波長は同じだ。

ソウルに言われた通り——いや言われなくてもだが——普段なら関わったりはしない。

(……さて)

このまま放っておけば、早々に誰かに見付かり騒ぎになるだろう。ソウルがわざわざ自分に頼んだぐらいだ、それはきつと避けたいはず。

ソウルの気配を探してみると、ルクエールと共にいて動く様子はない。魔力に乱れは無いから珍しく争っている訳ではなさそうだが。

(……全く)

人に頼んでおいてみすみす火種を逃がすとは何事か。甘いし間が抜けているし——

(仕方ない奴だ)

く、と苦笑して立ち上がる。彼を少し知る者がいれば目を見張っただろう。

自分の事にすら怠惰なラーが、自分と関わりのない事で動くとは、と。

だが勿論、ラーの中では矛盾していない。

相手は隠れながら慎重に移動しているようだから、慌てず歩いて行っても余裕で追いつく。辺りに自分より先に彼女に辿り着きそうな者もない。

果たしてあっさり障害なく彼女の元まで辿り着き。

「――おい」
「っ！」

逃げられても逃がさないように十分間合いを詰めてから声を掛ける。すぐ側で掛けられた声にユイリは驚愕して勢い良く振り向いた。勿論辺りの警戒を怠ってなどいない。ただラーの魔力制御が彼女の感知能力を上回っただけである。

「あ……ッ」

「ここでウロウロしていると殺されるぞ。基本、俺達は人間に優しくないからな」

「……っ」

無感情に言われたラーの言葉はユイリには相当怖かっただろう。瞳に何の興味も映っていないのが余計真実味を与えてくれた。

「ついて来い」

「え……っ？」

「死にたいのか」

ラーにそのつもりはないが、まま脅しているセリフである。答えられずにいるユイリに溜め息をついてぐいとその腕を引く。

「あッ」

「大人しくしている。その方が多分お前は無事に帰れる」

「……大人しくしてたら、いつ離してくれるの」

「せいぜい十数分だ」

ソウルが動き出し、ユイリを探すまでの間だけだから。

「十数分って……」

「いいから来い」

うだうだと話すのが面倒になって、ラーは構わずユイリを引き摺って歩き出した。騒ぐようなら気絶させておこうと決めた。

「ち、ちよっと——」

無論連行されるユイリは慌てたが、力でも魔力でもラーに敵わない事は判るのだろう、無駄に暴れたりはしなかった。

出来ればソウルに渡せるまで、このまま黙っていてくれるといいのだが。

第四章 完全の羨望

(……何なんだろう)

部屋——多分私室だ——に連れ込んだきり、彼は自分に何もしてこなかった。声を掛けられた時の言い様を考えると、自分が魔王とその血族を暗殺しようとしている人間だと知っているのだと思ったのに。

いや実際、知っているのだろう。

(どうせ、マナフレアだ)

だってあの標的の一人はマナの事を知っていた。しかも自分と間違った。

(全然似てない)

自分はマナのような出来損ないではない。歴代の中でも強い魔力を持つ稀代の魔術師だと、皆が口を揃えて言うではないか。

(それなのに)

一日姿をくらましていたマナと魔界で会った。マナの居所になんか興味は無かったから、本当に驚いた。

そしてマナはその話を両親としていた。——魔族の王子の事と、暗殺の事。

(余計な事ばかり!)

この仕事を請け負ったのは実はユイリの独断だった。魔王とその姪、そして半端者の魔族とを始末するだけで高位の魔族と契約させてやると。

どれだけ強大な力を持っていたても、誇り高い魔族はそうそう人間と契約などしない。一族の長い歴史の中でも高位魔族と契約を交わした者は稀だった。だから歴史の中の誰よりも、強力な力を手に入れたかった。

（なのにあいつは）

ソウル、とその魔族の事を呼んでいた。親しげな愛称を許されて。

（ソールステイリッヒ、それでソウル、か）

何が友人だ。半端とはいえ王族には違いない。自分でも喚べないような高位魔族と、あんな、あんな――

「……」

唇を噛みしめ、憤りに耐えるユイリを冷徹に見やって、ラーは自分が少し不快になっているのを自覚した。

ユイリはシュツイルオーレに似ているのだ。

ラーは力に溺れる者が好きではない。いやむしろ毛嫌いしている。

幼い頃からラーの才は他の誰より飛び抜けていて、それを求めて取り入ろうとする輩は少なくなかった。

その筆頭こそ、母親であるシュツイルオーレだ。

自分が人間の女に負けたという、しかも死んだ今でも自分に正妃の座を譲らないソウルの母への嫉妬を、そのままソウルにぶつけるような幼い女だ。

ソウルがハーフである、そういう言訳があるからこそ、体面を守

って余計きつく当たれるのだろう。

そのソウルにも実力で劣り、半端であると嘲りながら勝てない自分を誤魔化すため、ラーに媚を売りその力のお零れを得ようとする。シュツイルオーレほど露骨でなくとも、大概の者はラーを恐れるか、取り入ろうとするかのどちらかだ。

仕方のない事だ。自分の性格にも問題がある事はラーとて判っている。

自分の人格を愛してもらえようような努力をしてこなかった。だから皆ラーを『力』としてしか見ないのだ。

——だがそれでも、肉親は自分を自分として愛してくれている。

父とソウルは『家族』だ。

家族の為ならば心を碎いて手を尽くしても惜しくない。

「……感謝するんだな」

「え……？」

「ソウルの頼みでなければお前は多分俺が殺してる。嫌いなんだ、お前のようなタイプは」

「ソウル……って、さっきの」

「汚らわしい」

「きゃっ」

その名を口にした途端、ばちと目の前で雷が走ってユイリは体を竦ませた。

「お前がソウルの名を気易く口にするなよ」

「っ……」

ユイリには勿論ラーがそこまで拘る理由など判らない。しかし自

分が可愛いのなら触れてはならない領域なのだけは判った。

「——ん」

「っ」

ぴくとラーが何かに反応して顔を上げるとぴくとユイリも身を固くする。だがラーの興味はもうユイリには無い。

（動いた）

やっとこれでこいつを手放して大丈夫だ。

「おい」

「え」

呼び掛けられユイリは反射で顔を上げ、すぐ目の前に差し出されていたラーの指に仰け反った。パチン、と指を鳴らして一言だけで魔術を発動させる。

「メモリクラウド」

くら、と視界が揺らぐ。頭に靄が掛かり、思考が邪魔される。

——もう、何、も——

「ソウル、あれ」

「んッ？」

とりあえずルクエールとの話が落ち着いて、魔力を頼りにユイリ

を探して数分後。

くんとルクエールに襟首を引かれ方向を修正され、ちょっと苦しかったが黙ってそちらへ目を向ける。

そこにはぼんやりと床に座ったユイリが居た。

魔界、という異境の地で、しかも逃げている途中で、まさか休んでいる訳はないだろう。嫌な想像がぞつとソウルの頭を駆け抜けた。

「おい！」

「……あ」

呼び掛けられてのろのろと顔を上げて、二、三度瞬きをしてからはっとソウル達に気が付いた。

「——っ！」

「無事か！ 無事だな！」

表情を強張らせ仰け反ったユイリの肩を掴み軽くその魔力を探って、特に異常が無いのを確認してからほつと安堵の息を吐いた。

「あ、え？」

「お前を氣遣ったんじゃないわよ」

呆けたような素の表情になると、ますますユイリはマナに似ていた。それがまた面白くなってルクエールは冷ややかに彼女を見下ろしながらそう言った。

「とにかくここでは誰に見付かったも不思議はない。来い」

「ちょ、ちよつと——」

「黙らないと黙らせるわよ」

本日二度目の強引な連行。一度目の連行は覚えていないが。

「……」

どうするべきか。ソウルに手を引かれながらようやくまともに動き出した頭でユイリは先の事を考えた。

十中八、九聞かれるのは依頼人の事。そう言っていたし。

言ってしまった方が安全なのは判っていた。不意を突いて一撃で仕留めればおそらくいけるが、正面切って戦うのは難しそうだ。二人だし。

（……けどそれはおこぼれで見逃してもらってことでしょ）

アルバトラズ次期当主であるこの自分が、見逃してもらうなどと。

（絶対嫌）

自分はマナとは違う、と頑なにユイリは姉の事を否定した。他人に媚を売って生にしがみつく様な生き方はしない、と。

（だって私は違うもの）

ユイリは力で生きてきた。だから力が折れた時は――覚悟を決める時だ。

そうこうしているうちに階を変えてソウルの部屋に辿り着き、バタンとユイリにとっては牢に等しい扉が閉まる。

「別にとって食おうって訳じゃない。まあ楽にしろ」
「……」

言われて勧められたソファに無言で腰掛ける。座り心地が柔らかくて気持ちいいのに腹が立つ。ユイリの態度の硬さに溜め息をついてから気を取り直して咳払いをして。

「初めに確認しておくが、ユイリ・アルバトラズで間違いないな」
「……ええ」

マナと会っているならここで首を横に振っても無駄だ。顔以上に魔力は嘘をつかない。血縁の波長は何となく判るのだ。

「お前達に依頼したのはどのどいつだ」

「言うと思ってるの？」

勿論実際は『達』でもないがわざわざ修正してやる理由もない。

ユイリの答えにソウルは顔をしかめた。彼女をどうこうする気は無い。しかし言葉にしたのは依頼人を話せば、という前提付きでのみ。にも拘らずなユイリの態度は正直、面倒くさい。

「殺されようと依頼人の秘密は厳守か？ 大したプロ根性だ」

「それでもいいわ」

知らなければそう見えるかもしれない。的外れなソウルの言葉に、ユイリは歪んだ笑みを浮かべる。それが嘲った物を含んだ笑みである事はソウルにも当然通じてむっとする。

(可愛くない……ッ)

「お前、本当にマナの妹か？」

「よく言われるわ」

良い意味でも、悪い意味でも。

「でも姉妹だからって似る訳じゃない。私とマナじゃ出来が違いすぎるから」

「お前……っ」

あまりなユイリの言い様にソウルは次の言葉を言うまでに一瞬凍った。

「お前とマナは姉妹なんだろう。何とも思わないのか」

自分とラーも腹違いではあるが、兄弟だ。一生必要ないだろうが、ラーが自分の手を借りる時が来れば出来る限り尽くしてやりたいと思うし、その力故に悪し様に言われているのを聞くと腹が立つ。

だというのに、力が無いというだけでそんな言われ方をするのか。肉親にまでも。

（いや、確かに俺もラーが何考えてるのか判らんし親父も俺を良くは思っていないが。それでもそこまで言われた事は無いぞ。……他人にならとにかく）

「思わないわ。当然だもの」

「……」

果たしてこいつが死んでマナは悲しむのか。多少手荒くしてもいいんじゃないかと、そんな囁きが胸を掠める。

「人も魔族も変わらないわね。どうするの、ソウル」

ソウルのように憤りはしなかったが、呆れた調子でルクエールはそう尋ねた。正直、さっきよりも格段にユイリの存在はどうでもよくなった。

まずソウルが気に入るタイプではない。

「……正直追いついてやりたいが」

しかし送り返してもまた来るかもしれないし。今度も上手く見逃してもらえない相手に見付かるかどうかなど、尚更判らない。

「こいつは吐きそうには無いしな」

「任せてくれれば吐かせてやるけど？」

「いらん」

ルクエールの提案は即行で拒否して、ソウルは腕を組んで考え込む。

「……仕方ないな。次の奴を待ってそいつに吐かせるとしよう。こいつはここに置いておく」

（次の奴なんか来ないけど）

けれどそう思うのは勝手だし、どうでもいい。別にアルバトラズにだって——それ程帰りたい訳ではないから。ユイリにとって世界は、どこでも同じ。

「そう。なら私もここに留まるわ」

「ハアッ!？」

勢い良くルクエールを振り向くが、当然だと言わんばかりの表情で動じることなく視線を受け止められた。

「間違いが起こってからではこの女を殺しても遅いものね」

「起こるかアッ!」

「私となら間違いではないわよ」

「起こるかアアアッ!！」

全身全霊、全力で拒否してもくすくすと笑われるだけ。何となくこれ以上何を言っても勝てない気がしてギリギリと歯を噛みしめ堪えてふんとそっぽを向く。

「言っとくがな！ 勝手に人の寝室に入るなよ！ 入ってきたら一生痴女扱いしてやる！」

「別に構わないわよ」

「っだアアアア！ お前のそーゆー所が俺は大っ嫌いだっ！」

「お前のそういう所が私は大好きよ」

ぎゃあぎゃああと喚くソウルとそれを楽しそうにあしらうルクエールの二人を、冷めた目で見ながらユイリは苛々と手を組んだ自分の甲に爪を立てた。

（馬鹿だ。こいつ等）

こんな下らない事で騒げるんだから、間違はなく馬鹿だ。

（理不尽だわ）

なのにこいつ等は、何の努力もなくそれだけの力を持っている。

——こんなにも自分は努力しているのに。

ソウルとルクエールのやり取りはそれだけでユイリの心を波立たせた。もうそんな物を聞いていたくなくて、目と一緒に心を閉じる。

——いつものように。回り全ての雑音を消して。

……ただ、一人の世界へと。

（……朝か）

いつもより睡眠時間は短いのだが、体は規則正しくいつもの時間に眼を覚ました。

昨日何だかんだとルクエールと遅くまで騒いでいたせいで、まだ頭

も体も目覚めきれずにぼんやりしている。

……案外、悪くないものだった。下らない話で騒いで、笑うというのは。

（普通に話せるのはラーぐらいだったしな）

だがラーは馬鹿話をして騒ぐタイプではないので疲れる程に話す、という体験は初めてだった。

（あいつと、一緒にか）

悪くはない、が――

（それとこれとは別だけどな！）

一瞬過ったルクエールの愛人に収まるという想像をぶんぶんと首を振って追い出した。

（流され過ぎだ）

どれだけ喜んでいるんだと、気を引き締めて起き上がる――と。

「！」

ぴく、と微かな魔力に気が付いてソウルは顔を上げ窓の外を見る。知っていないければ、それが少し特別でなければ、気にも留めない程の微かな魔力。

（マナ……っ！？）

絶対の自信を持つ自分の感覚をも信じたくなって、もう一度慎重に探ってみて、やはり間違いないのを確認した。

（何故だ？　——ユイリか？）

ユイリの態度を見るにとっても心配する・されるの関係になりそうにないが、それでも妹は可愛くて心配して来たのだろうか。

（全く！）

マナが来た所で何が出来た訳もない。人間であるというだけでマナ自身だって危ないのだというのに！

立ち上がって急いで身支度を整えると、その間にもマナは動いて城へと向かってきていた。扉の場所はおそらく以前と同じだ。

（ユイリの行き先が城だと——まあ判るか。他に魔界に来る理由なんか無いんだろうしな）

ルクエールに見付かるとまた煩そうだが、扉が開いても何の反応も無しという事はおそらくまだ寝ているのだろう。案外朝に弱いのかもしれない。

だがそうであれば彼女はマナの魔力など気にもしないだろうから、それは今ソウルにとって幸いだ。

（今起きていたらいつもは気にも留めんマナの魔力でも探るだろうからな）

いつもより二割は早いスピードで身なりを整えると、ソウルは部屋を抜け出し町へと向かった。マナもこちらに向かってきている分

だけ早く合流できるだろう。

幸い今は朝も早くて町にも人の姿は疎らである。

(いた)

「マナ！」

「――あ。ソウル！」

名前を呼ばれ気が付いて、マナは明らかにほっとした表情をした。

「っ」

友人だと、認めたからこそその気易さだ。判っている。判っているのに一瞬鼓動が跳ねあがった。

(ななな、何だコレはッ！)

結構動揺が表にも出てしまっていたがマナはそれにも気が付かない。

「良かった！ ソウルに会おうと思ってたの！ ユイリが――私の妹がこっちに來たまま帰ってこないみたいで。多分お城に行っただと思うんだけど」

(やっぱり妹か)

あんな妹でも可愛いのかと、マナの肉親への愛情を感じると同時に少し呆れた。

「ソウル？」

「いや、何でもない。心配するな。俺が預かってる」

「そうなの？ 無事？」

「ああ」

「そっか、良かった」

安堵の息をついてマナは微笑った。それを見てやはりアルバトラズの一族を傷付けてはならないと思った自分は正しかったのだと、面倒でもそうしておいて良かったとほっとする。

「お前、アルバトラズに依頼したのが誰かは聞いたか？」

「ううん。今回の事を受けたのってユイリだったみたいで。父さんも母さんも知らなかった。びっくりしてたわ」

「そうか。……まあ、そうだろうな」

むしろ納得した。今時魔族にケンカを売ろうなどまともな人間ならやらないだろう。何と言っても事は王の暗殺だ。

（そーいや今の今まで親父が殺されるとか考えてなかったがもし本当に親父が殺されたらこっちも黙ってられないんだな）

……ユイリはそれを判っていて受けたのだろうか。

（つーか依頼した方も方だぞ。万一成功したら人間と戦争でもする気なのか？）

そんな事をして何の得があるというのか。

（やはり他国の……いやそれは無い。ラーの見解だ。ほぼ間違いない）

「――まあいい。それなら何としてでもユイリに聞くだけだ。マナ、お前も来い」

「うん」

下手な事はしないと思うが、今ルクエールと二人きりだというのが少し心配だ。

マナを連れ——やや急ぎ足で城へと戻った。

(……またルクエールは煩いんだろうか)

自分の部屋に戻るだけだというのに、気が重い。扉の前で一回動きを止めたソウルにマナは首を傾げた。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

今の状態ではマナとルクエールを会わせないようにというのは無理な話だ。覚悟を決めて部屋へと入る。

流石にもう起きていて、ソウルが戻ってきたのも判っていたのだろう。すぐに出迎えにまで来てくれた。

「お帰り、ソウル。どこに——」

「っ！」

出迎える時は穏やかだったルクエールの表情が、マナを見た途端凍り付いた。マナの方は敵意という程でもないが、それでも驚いてその場に固まってしまった。

『……ソウル……』

「なっ、何だその責めるような声はっ」

ルクエールはある程度予想していたが、何故にマナにまでそんな声を出されなくてはいけないのか。

「何でこの人がソウルの部屋に居るのよ」

「何でこの小娘がお前と居るの」

二人の疑問の内容もタイミングも、ほぼ一緒。

「べっ、別に何もおかしくはないだろうがッ」

「おかしいわ」

「おかしいでしょう。――大体お前、帰ったのではなかったの?」

最後はソウルではなく、マナへ向けてだ。至近距離で睨みあう女のすぐ側程嫌なものはないと思う。

「戻ってまた来たの。ユイリがこっちに来てるんじゃないかって思ったから」

「……ふうん」

少々不可解そうに、しかし一応ルクエールはマナの答えに頷いた。

「向こうはそうでもないみたいだけど、お前にとっては可愛い妹なのかしら?」

「……可愛くは……ないかな。むしろちょっと苦手」

家族なのにねと、少し困ったように情けない笑みを浮かべた。

「まあそうでしょうね。それで、お前は何をしに来たの?」

「何って……」

「お前が訊けばあの娘は答えるのかしら?」

「ないわね」

ひやり、といったルクエールよりも敵意を含んだ冷やかな声音で、奥から出てきたユイリ自身がルクエールの言葉を否定した。

「ユイリ……」

「何しに来たの？ まさか私を助けになんて言わないでよね。何にも出来ないくせに」

「……確かに私に魔力は無いけど戦う術がない訳じゃないわ」

「だから何？」

そんなものは役にも立たないし、無意味だ。目が冷ややかにそう告げる。ぐっと言葉に詰まってからしかし気を取り直してマナはユイリを睨んだ。

「ユイリ、どうしてこんなことしたの」

「……」

「魔王の殺害なんて、例え成功したってただじゃ済まないって思わなかったの？」

（思ったわ）

勿論思った。だからその話を聞いた時、馬鹿馬鹿しいと受けるつもりなど無かったのだ。

そもそもアルバトラズの当主は父で、自分じゃない。依頼を独断で受けて人を動かすなど、できるはずがなかった。

そう思っていたのに。

至上の力を手に入れたいのだろうと、心を見透かしたような言葉を紡がれて。

魔王暗殺の事も気にするな、新たな魔王となる男はそんな事に興味は無いと、そう囁かれて。

「ねえ、ユイ」

「放っという」

「っ」

皆まで聞かずにユイリはマナを拒否した。マナの全てを。欠片でも自分の中に存在させたくないのだというように。

「……マナ」

「ん？」

あまりの態度の硬さに、思わず気遣う声を掛けたソウルにマナは振り向いて微笑した。大丈夫だというように。

（気持ち悪い……ッ）

マナの姿を見ているだけで、心が逆撫でられて吐き気がする。ギリと鳴る程に強く歯を噛みしめ、ユイリは硬く眼を閉じた。心を閉じるのは、いつもの癖。

「お前、マナの何がそんなに気に喰わないんだ」

（煩い）

耳も塞いでしまいたかったが、聞くに耐えないというポーズを見せるような真似はしたくなかった。ただ煩わしいから目を閉じている。それだけだ。

「……話にならんな」

「正にね」

完全に外界を無視したユイリに、ソウルとルクエールは呆れた息をつく。相手を支配する精神系の魔術を使えば吐かせる事は出来るが、マナの手前それはやりたくない。

（しかし、他には誰も知らんのだからこいつを吐かせるしかないんだが……）

隠れてやるのはもっと後味が悪いので、マナには初めから言っておいてやはり魔術で――

「ソウル、ちょっといい？」

手詰まりに最終手段を本気でソウルが考え始めた時、マナにそう呼び掛けられ振り向いた。

「何だ」

「私を魔王に会わせてもらえないかな」

「親父に？」

「そう。アルバトラズに――って言うか人間に、魔族に敵対するつもりはないんだって、伝えて来るのもこっちに来た役目なんだ」

本来ならば当主が来るべきなのだろうが、アルバトラズ側もそこまで魔族を信用していない。王族であるソウルと面識があるのもあって、名代としてマナが来たのだ。

「ああ、そうだな。それは言っておいた方がいい」

「そうね。人と戦争なんて面倒なだけなもの」

「ありがとう、ソウル……と、ルクエール、さん？」

マナに名前を呼ばれルクエールは微妙な表情をする。気安く呼ばれる覚えはないが、じゃあどう呼ばれば許せるかと言われても思い付かなかったのだ。

「……ええ」

結局その微妙な表情のままで頷いた。

「じゃあルクエール、ユイリを頼む」

「大丈夫？ 私が行きましようか？」

魔王本人はとにかく、シュツイルオーレがソウルを毛嫌いしている事は、勿論ルクエールも知っている。また嫌な思いをする事になるだろうという気遣いでそういったルクエールに、一瞬心が揺らいだ――が。

「必要ない。俺様があんな下らん輩の何を気にすると？」

「そう。それならいいわ」

ソウルが心配するまでもなく、ルクエールはそう言っただけで頷きあつさり引き下がった。この手の話題ではむしろ気遣う方がソウルは嫌がる。

人に強く見せる為にソウルは強くなった。ならばその強さを信じてやった方がいい。その信頼こそが、今度は本当にソウルを強くする。

「行くぞ、マナ」

「うん」

ソウルに促され、マナはその背に付いて歩き出す。

（何だろう。もやもやする）

ソウルの部屋に居たルクエールを見た時からずっと燦っていたのだが、先程また胸のすぐ表面にまで顔を出してきた気がした。

（何でだろう。自分の居場所で自分を認めてくれる人を作ったソウ

ルが羨ましい、とか？)

ルクエールが本気でソウルの事が好きなのは、会ったばかりで、切り取った場面しか見ていないマナにもすぐに判った。

彼女とソウルが仲良くなって、もっとソウルが居やすくなればいいと、そう思っていたつもりだったのに。実際そうなってみればこんな気持ちになるなんて。

(私って心狭かったんだな)

ちよつとショックだ。

「……そう言えばさ」

「何だ」

「まともに聞いてなかったけど、ソウルとルクエールさんでどんな関係？」

ルクエールの方は判るのだ。それにソウルが嫌がっていたのも知っている。だがそれは感情であって、今マナが知りたいと思ったのは現実に意味を持つ関係の方だった。

(お前は私のもの、とか言ってたし)

「別に何の関係もない。……あいつは俺を愛人にしたいんだ」

「愛人んっ？」

予想していなかったあまりの単語にマナはトーンの違う声を上げた。

「何で愛人っ？ フツーに旦那さんとか、そーゆー感じでしょあの人はどっちかつーと！」

確かに容姿は結構、色っぽいというか婀娜あだっぽいというか、そういう雰囲気があるのだが、ルクエール本人を見たマナの感想からいくと、どちらかといえばむしろ乙女だ。

「あいつは第一王位継承者なんだ。俺がそんな奴と正式に結婚など出来る筈がないだろ」

「――あ」

――半端だから。

(……そっか)

家から興味を持たれていないマナにはそんな必要はないが、例えばユイリが今、自分と同じような魔力をほとんど持たない男を選んだとしたら――多分両親は認めないだろう。

(本当に同じだわ)

どこの世界でも、社会は一緒だ。

更に館を変え、歩く事十数分。ようやく魔王の私室にまで辿り着く。

ルクエールにはああ言ったものの、勿論いなきやいいなとは思うのだ。

だがぐずぐずして気にしていると、マナに見られるのも嫌だった。覚悟を決めてノックをする。

「ソウルか。入れ」

「ああ」

ソウルが声を掛けるまでもなく、訪れた者が誰かを魔力で悟ったらしい。という事は隣にいるマナの事も勿論判っているだろう。

幾ら微笑すぎる魔力とはいえ、流石にこんな近くまで来て魔王が気が付かない、などという間抜けな話もないだろうから。

(――げっ)

やはり幸運は二度続かない。中にはシュツイルオーレが居た。

何分魔王の部屋だけに結界は厳重で、中に居る者の魔力が探れないようになっていて、心構えはできなかったのだ。

心の中の自分が拒否する声を上げるが、表情は取り繕って奥へと進む。

「お前、また……」

二日続けてソウルが王の元を訪れたのが余程面白くないらしく、シュツイルオーレはその整った顔を盛大に歪め――ハッと表情を強

張らせた。

(?)

その視線の先を追ってソウルもはつとする。

マナだ。マナを見たのだ。

魔界に人間が居る事への驚きとか嫌悪とか、そんな生温い驚き方ではなかった。その強張った表情は何かを怖れているようですらある。

(――まさか……)

マナを見てのこの反応。そうだ、それに――ラーは言っていたではないか。『俺の所には来ない』と。

シュツイルオーレが依頼人であれば、成程当然ラーを暗殺などしようとしないうだろう。自分やルクエールが邪魔なのも領ける。そして何故この時期なのか。

自分はただ気に入らないだけだろうし、ルクエールが居なくなれば結局最も王に相応しいのはラーなのだから。

(いや待て)

しかしそれもやはりおかしい。それならなぜ魔王が標的に入るのか。大体人間を見下すシュツイルオーレが、人間を使って謀などをするだろうか？

「どうした？」

「！」

魔王に声を掛けられはつとソウルは我に返った。シュツイルオーレも同様に、取り繕うように腕を組んでソウルを睨んだ。いつもの

ように。

「何の用向きがあつてこの場に姿を見せたのです。しかも人間などを連れて」

「俺は親父に用があつて来たのだ。貴様になど用は無いわ」

「お前……ッ。相変わらず口の利き方を知らない子供だこと。腐った人間の血統が滲み出ている様だわ」

「貴様……ッ！」

「ソウル、シュツイルオーレ」

かつとなつて拳を握ったソウルを諷めるように魔王から静かに声が掛かる。

「っ……」

殺してやりたい。

本気でそう思った。だがこの女は父親の妻で、兄の母だ。流石に出来ない。

「ソウル、来い。そちらの娘、お前も」

「あ……」

くる、と背を向け奥へと入っていった魔王とソウルを交互に見ると、ふー、と長い息をついてソウルもその後へ付いて歩き出す。

「マナ」

「うん」

「……」

来るな、とは言われなかったが呼ばれたのはソウルとマナだ。シ

ユツイルオーレがそこに加わるのはおかしい。静かに彼等の去った後を睨みつけ、ふいとその場を後にした。

「さて。その娘がそうか？」

「え？」

通された部屋で席に着き、開口一番そう言った魔王にきょとんとマナは眼を瞬く。

「つと、ソウル……？」

「親父には暗殺を請け負ったのがお前の一族だという事を言ってる」

「あ、そ、そうなんだ」

言いに来た内容の一部ではあるが、知られているとなるとまた少し違う居心地の悪さだ。

「それで、俺に何の用だ？」

しかし気遅ればかりしてられない。魔王にそう水を向けられこくと喉を湿らせてからマナは真っ直ぐに彼を見た。

「――今回貴方の暗殺を請け負ったアルバトラズの当主の代理として参りました」

「ほう？」

「今回の一件、一門の仕出かした事に間違いはありません。けれどアルバトラズの意味でもありません」

「成程。まあ組織が一枚岩である事の方が稀だといえるな」

あっさり魔王はマナの言を認めた。そこには何の感情も伺えず、正直不気味だ。

「こちらとしてもその方がありがたい。アルバトラスを根絶やしにすればまた魔族の侵略かなどと、人間達と戦争するのも馬鹿らしい」

しかし勿論今回の件がアルバトラスの意思であれば、戦争の引き金を引くのを判っていても報復は行った——そんな意志が見えてマナは改めてぞっとした。

「それで、俺の暗殺を請けた者の所在は判っているのか？ 既にそちらの手に居るのなら早々に渡してもらいたいのだが」

アルバトラス全体に責任を問うつもりは無い。しかし当然、本人は別だ。

「まさか隠しだてはするまい？」

ユイリも渡せない、というのは普通に考えて都合が良過ぎる話だが——

「親父、今回の件を受けたのはこいつの妹なんだ」

「……ほう」

少しばかり間を置いて魔王はそう答えた。前にソウルから襲撃して来た者を殺さないで欲しい、との頼みは受けたが、まさか襲って来ている者イコール直接依頼された者だったとは。

……少し困った。

「見逃してはもらえないか」

「……ソウル」

自分の子である事を、どんな時でも武器にはしようとしなかった息子の頼みだ。流石に魔王は少しばかり即答を躊躇った。しかし答えは決まっている。

それを口にした所で。

「構わんだろ」

それは出来ない、そう口を開きかけた魔王を遮ってそう言ったのは、いつから聞いていたのか、何の用があつて来たのか、つかつかと真っ直ぐに部屋に入つて来たラーだった。

「ラー……」

「ラー、お前、何で」

珍しい、と言いたげなソウルを一瞥するとラーは魔王へと目を戻す。

「たかが人間だ。それに一族の中でそれなりの地位のある奴を殺せばどのみち人と険悪になるぞ。まかり間違つて戦争にでもなるのは御免だ。面倒くさい。報復なら身内だけにしろ」

「……そうか」

台詞の内容はラーならば言っておかしくない物。しかし今ここに来てまでラーがそれを口にした理由は。

「……いいだろう」

「!」

静かに頷いて言った魔王に、はっとしてソウルとマナはラーから視線を彼に戻す。

「ただし二度目は無い」

「はい!」

立ち上がりマナは勢い良く頭を下げた。

「ソウルに感謝しろ」

「はい」

(それと……)

ソウルにも勿論だがもう一人。マナはラーへと向き直って頭を下げた。

「ありがとう」

彼が初めの頃ソウルがマナを押し付けようとした兄だという、ラフィリアークデイルだろうと、呼ばれた愛称と二人の態度から当たりを付ける。

(……確かに格好良いんだけど)

それでもやっぱり——もし契約するならソウルがいいなと、そう思った。

「そーいやラー、お前何しに來たんだ。親父に用か?」

(いやいやいや! 違うでしょーっ!?)

さも意外だと言わんばかりのソウルの質問にマナは背中に汗が流れた。どう見たって、聞いたって、彼はソウルを援護する為に来ただろう、と。

（お父さんの態度見てれば判るじゃないっ!？）

初め魔王は厳しい表情をした。やはり駄目かとマナもそう思った。魔王が態度を変えたのはラーが言った後だから、確かにパツと見『ラーが言ったから』、魔王が譲歩したように見える――が、絶対に違う。

あれはラーがソウルのために言ったセリフだったから、魔王がそれを汲んでくれたのだ。

（……愛されてないとか、そんな事無いよ。ソウル）

まあ二人とも、あえてそれを見せないようにしている節があるから、子供の頃からそう思い込んでいるソウルが気が付けないのも無理は無いのかもしれないが。

「まあ、そんなもんだ」

「そうか。――ソウル、お前の用は済んだだろう。少しラーと話す事がある。席を外せ」

「判った」

突っ込んで訊く事もせずにソウルは頷き席を立った。お互い愛しているのに違いはないのに、やはり関係はどうも歪だ。

ソウルに付いて魔王の部屋を後にして、心の中で首を傾げつつ、それでも上手く行ってるならと納得する事にした。

(……そうよね)

自分達に比べれば、彼らは互いを愛しているだけ余程健全だ。

「どうした、マナ」

「あ、うん。どうしようかなくて」

「そうだな。とりあえず頷いてはもらったがこのままでは埒があかん。あまり時間を掛けていると親父の気も変わるかもしれんし」

とても本人には言えないので、慌てて誤魔化す様に言ったマナにソウルは真剣に考え込んでそう答えた。そう、今はそれが重要だ。改めてマナは頭を切り変える。

「――そう言えばあの人、ちょっと変な顔してたよね」

「シュツイルオーレか？」

「っっていうんだ？ 魔王の隣に居た女の人」

「ラーの母親だ。確かに俺もそう思った」

「やっぱり私が人間だから？」

それにしてもあまりの顔をしていたと思ったのだが。しかし知らなければそれ以上の理由が出て来なくても当たり前。

しかしソウルにはその表情を見た時に頭に過った答えがある。

「いや……」

「？」

どう言っただのかとソウルは言葉を濁して一度切った。何にしてもこんな誰が聞いているか知れない城の通路で話すような事ではないのは確か。

「それに関しては少し考えてた事がある。部屋に戻ってからだ。ユイリの反応も見たいしな」

「……うん」

「心配するな。多分大丈夫だ。多分……依頼した奴は俺が考えている奴で間違いない」

不可解な点が残るが、それはユイリから名を確認し、本人に問い
糺^{ただ}せばいい事だ――

「戻った」

「ああ、お疲れ、ソウル」

待っている間暇だったのだろう、ルクエールの手には、ソウルの部屋にあった物だと思われる本が開かれていた。微かにむっとした表情をしたが、特に何も言わずに辺りを見回して。

「ユイリは」

「変わらないわ。向こうでずっと外界を塞いでる」

「そうか」

頷きそちらへ向かおうとするソウルに、ルクエールは読んでいた本を閉じて立ち上がる。

「何か収穫でもあった？ 普通に訊いても無駄なのはもう判っているでしょう」

「ああ、それなりのが一つな」

「！」

にっと笑ったソウルにルクエールは少し驚いた顔をして、それからふわりと微笑んだ。

「そう。良かったわ」

ルクエールにしてみれば正直ユイリなどどうでもいいのだ。しかしこれでソウルの望む結果になるのなら、それが純粹に嬉しいと思う。

「――ユイリ」

扉を隔てた客室へと入り、ソウルはユイリの名を呼ぶ。当然反応は返ってこなかった。

「お前に依頼したのはシュツイルオーレだな」

「えっ？」

「何ですってッ？」

ソウルの言葉に反応したのはむしろマナとルクエールで、ユイリは変わらず沈黙を守ったままだ。表情も微動だにしない。

「もしかすればお前は名前も知らんかもしれんがな。三十路過ぎぐらいの、金髪赤眼の女だろう」

「……」

「何を取り交わしたか知らんが、あの女は人間との契約など守る事はないぞ。会ったなら判っているだろうがシュツイルオーレはお前等を見下している」

「ちょ――、ちょっと待ちなさい、ソウル。シュツイルオーレはこの国の王妃よ？ 何故陛下を」

反応しないユイリに更に言葉を重ねるソウルに、ルクエールは多少動揺を残したままそう問い掛けた。ソウルが持ったのと同じ疑問だが。

「さあな。その辺は本人に聞けばいい。だが俺とお前が邪魔な理由は判るだろ」

「……ラーに王位継承権を戻そうというの？」

「そうだ」

ソウルの方は王位継承権に関わりは無い――が、それ以上にシュツイルオーレには嫌悪されている。理由はそれで十分だ。

「マナを見て動揺した。あれは人間を見たからとかそんなんじゃない。マナとユイリは似てるからな」

そっくりという訳ではないが、彼女達をあまり知らない者が一瞬見れば見間違えてもおかしくないぐらいには似ている。

「……でもそれだったら……嫌だよね」

「……マナ」

義理でも何でも母には違いない。いやそうでなくともやはり身内から殺したい程に憎まれるなど、あんまりだ。

（それにお兄さんとは仲良いみたいだし）

ソウルの兄の母がマナの妹にソウルと父とルクエールの暗殺を頼んだ。どちらにとっても嫌な話だ。

「シュツイルオーレに関してはその手の感傷は一切ないから心配なくてよ。あの女は昔からソウルを嫌ってるから。当然ソウルもラーも。ラーが何で嫌ってるのかは知らないけれどね」

「あいつの考えてる事はよく判らんからな」

「そ、そうなんだ」

考えている事が良く判らなくても、兄弟仲に問題は無いらしい。ラーの方は結構把握している感があったからかもしれない。

「とにかくだ、さっさと吐け、ユイリ。このまま黙っていてもお前に何も得は無いぞ。今ならお前にもアルバトラズにも人間にも、何の咎もなく解放してやる」

「……だから何？」

く、と唇を歪に吊り上げユイリは笑った。

「アルバトラズに帰った所で、私は追放でしょうね」

「ユイリ、それは」

「別にそれは構わないわ。でもアンタの思う通りになんかなってやらない」

「っ……」

「アンタもアルバトラズも人間界だって、どうにでもなればいい」

その年頃の少女に相応しくない、あまりにも捨て鉢な態度。しかも彼女は本気で言っている。それが判る。

「ユイリ、お前……どうしてそこまで」

マナに聞いた所によればユイリは当主の娘に相応しい、高い魔力を認められアルバトラズの次期後継者として目されている人間だ。当然アルバトラズ内でだって相当の待遇を受けているだろう。

なのに一体何故、アルバトラズまでも嫌っている様な事を言うのか。

『力があつたって王の子供だからって、別に居やすい訳じゃない』

ふと以前ラーがそんな事を言っていたのを思い出した。

純血の魔族で、歴代稀な強大な力を持って、誰からも尊敬と畏怖の

対象として崇められるラーも、このハインシュベルクそのものはどうでもいいのだと、そう言っていた。

その後にラーが自分に向けてくれた笑みが本物だと思うから、ソウルは必ず、ラーの為にならば力を惜しまず何かをしようと、その時そう決めたのだ。

――正直ソウルは、初めラーが苦手だった。

直接血の繋がった父でさえ自分を愛してはくれないのだ。

完全な純血であるラーから見れば、またさぞ自分は汚らわしいのだろうと。彼の母であるシュツイルオーレがそうだったから余計だったかもしれない。

だがラーは何の感情も見せなかった。兄であり弟であるその関係だけを受け入れてくれていた。

周囲からの悪意に疲れていたソウルにはそれだけで十分に、嬉しかったのだ。

それからラーの側が一番心地良くなった。ラーもまた同じである事は何となく空気で判っていた。お互い口にもしなかったが。

「……お前、自分が愛されていないと思ってるのか」
「っ」

ぽつり、と不意に向けられた言葉にユイリはぎょっとしてソウルを見て、そして慌てて眼を逸らした。

「愛されているのは自分の力だから、だからどうでもいいと思ってるのか？」

「馬鹿にしないで！」

一度は逸らした眼を、我慢出来ずに戻して立ち上がりユイリは叫ぶ。

「私の力は私の一部よ！ それは私が認められているのと同じ事！」

「ユイリ、お前——報酬に何を約束された？」

「関係無いわ」

「金や何かじゃ動かんだろう」

人間にとっての魔族のイメージというものはよく判らないが、それでも魔王暗殺などを引き受けるのだ。相当のリスクを背負う事になる。金ではいくら積まれたって安すぎる。

しかし相手がシュツイルオーレなら、ユイリが自分が認められるのは魔力だけだと思っているのなら。

「……お前、ラーとの契約を条件にされなかったか？ 暗殺が成功すれば魔王になる男だ」

「……っ」

「そうなんだな」

「馬鹿馬鹿しい」

呆れた息をついてルクエールは腕を組んでユイリを見下ろす。

「ラーがそんな契約に応じるのですか」

「それは俺達がラーを知っているからだ」

何も情報の無いユイリが、魔王の妻だというシュツイルオーレからそう言われれば疑うだけの物がない。勿論シュツイルオーレ本人を疑わなければ、だが。

それもユイリが力を欲していたなら、ほんの少し欲望を後押ししてやれば簡単に乗せる事が出来ただろう。精神に作用するような魔術だって存在する。

「ユイリ」

「……何」

「お前とマナはやっぱり似ている。俺はお前もそう嫌いじゃない」

ユイリはきつと――怖かったのだ。

力の無いマナの扱いを見ているからこそ、余計力に拘ったのだろうから。

「お前がアルバトラズに帰りたくないならこっちに来ればいい。ま、こっちが過ごし易い訳でもないがな」

「――は？」

思ってもみなかった言葉だった。思わず間の抜けた声を上げるユイリは啞然として固まった。

自分を殺す依頼を受けた相手の身を、引き受けるത്？

じわじわとソウルの言葉が頭に沁み込んで来て、同時にふつつつと怒りが込み上げてきた。

「マナと似てるから？」

「ああ、似てる。自分を認めさせようと必死なのがな」

そしてそれはつまり、ソウル自身にも似ているという事だ。

「マナを嫌ってる私にどういう神経でそれを言うの？ 大体私の力は誰もが認めてるのよ。必死になる必要なんかそもそもないわ」

「そうだ。必要無い物を求めずにいられないぐらい、お前は不安だつたんだ」

「……っ！」

ぎ、とユイリは唇を噛み、声を堪えた。ソウルの言っている事は

——本当だったから。言葉を発したら感情が突いて出てしまいそう
で。

「お前はマナが羨ましかったんだな」

「えっ？」

まさか、という響きでマナは声を上げた。マナから見れば何もかも
を持っているユイリが、自分の何が羨ましいと？

「……そうよ」

「——ユイリ」

「だってあんたが愛される時は『マナフレア』だからだもの！」

魔力がないからこそマナにはマナ以外の価値は無く。

しかしユイリは違う。マナが魔力を持たない分余計、愛されるのは、
褒められるのは、認められるのは常に魔力だけ。尊ばれるのは魔力
だけ。

（だから——）

「だから力が欲しかったんだな」

「そうよ」

いくらあっても安心出来ない程に——

「お前の追い詰められ方は、やっぱり俺と似てる。ま、そのために
他人を殺そうってのはあまりに身勝手だがな」

だがユイリにそうさせたのは、おそらくアルバトラズを始めとする
彼女の周囲の人間で。

「喜べ。まだ誰も死んではない。お前はまだ引き返せる」

「……………」

「俺がお前の居場所になってやる」

「……………本、当に？」

魔族である——しかも強大な力を持つソウルには、自分の魔力など価値は無い。彼は自分を『ユイリ・アルバトラズ』という個人を受け入れてくれると——

「それは認めないわ！」

「無責任にそーいう事言うの良くないと思う！」

弱々しく、しかし期待を込めて呟かれたユイリの言葉にソウルが応えるよりも早くマナとルクエールが異を唱えた。

「な、何でお前等にんな事言われなきゃならんのだ！」

二人の勢いに押されつつ、しかし納得いかずに反論する。

「だ——、だって、それは」

「お前は私のものなのよ！ 他の女と関係を持つとうだなんて認めないわ！」

マナの方は言い淀んだが、ルクエールはすぐさまそうきっぱりと言いつつ放った。

「……………そうなの？」

ユイリの視線が冷たい。マナが機嫌を悪くした時とやはりよく似ていた。

「あ、アホかッ！ だから俺はお前のものではないし、っーかそもそも何でんな話になるんだ！」

「そーゆー話にしかないでしょッ！」

ソウルとしては自分がラーに感じるのと同じ、気安い場所を作ってやりたかっただけなのだ。そこに男女の意識は無い。そもそもソウルはまだ色気よりも食い気——ならぬ、ケンカっ気の方が強い。つまりはほぼ興味対象外。

「……ふーん」

二人はとにかくソウルにその気がないのだけはユイリにも伝わった。

（……うん、でも、判る）

ソウルは優しい。それは自分の弱さを克服した強さから来る優しさだ。

自分が辛かった分だけ人が辛いを見ると同調して、それを癒してやりたいと思うのだ。その辛さを知っているからこそ。

（……そうだね）

自分は弱い。

判っていたけれど認めようとしなかった自分の弱さをユイリは認めた。

頑張っていたつもりだったけれど、いや実際頑張ってはいたけれど。それは歪な価値観に合わせようとしていただけだった。

全然違う方向を向いていながら、いや、だからこそ違う方向を向い

て進む強さを持っていたマナが羨ましかった。
羨ましかったから、嫌いだった。

「……ソール」

「あ？」

怒鳴り合ってぜーはー言いながらソウルはユイリの呼び掛けに振り向いた。

「私に話を持ってきたのは、確かに、その女だったよ——」

第五章 母と女の言葉

「ユイリ、お前は一度人間界に戻れ」

「どうして？」

「お前が戻らなかったら誰かが暴走して来るかも知れんだろ」

もう正式にアルバトラズから人が来る事はないが、それを知っているユイリ個人を助けに来る者はいるかもしれない。

「これ以上面倒な人間を増やしたくない」

「それは大丈夫。もう父さん達が知ってるから」

「アルバトラズとしての対応がどうだろうが、お前に忠実な奴はいないのか？」

マナが魔王と謁見した際に、『アルバトラズの意味ではない』とはっきり言った以上勿論制止はしているだろうが、全員が全員従う保証があるのかという事だ。

「大丈夫だよ。……アルバトラズじゃない私に価値はないから」

だから当主に逆らってまで自分の意思を通そうとする者などいない。その自信がある。……虚しいけれど。

「私も行く。その方がいいでしょ？」

「……まあな」

何と言ってもユイリは当事者だ。その言葉には素直に頷く。

「ならそれはそれでいいとして——どこから行くの？」

「そうだな」

ルクエールに言われてソウルは意識しないで腕を組み、少し考えた。魔王の所へ行くか、シュツイルオーレの所へ行くか――

「シュツイルオーレだな」

考える時間は短かった。すぐにソウルはそう結論を出す。コソコソ言い付けるような真似は好きではない。

「そうね、けど……」

「？」

「何でこんな事をしたのかしら……」

シュツイルオーレは名前こそ第二妃だが、扱いは正妃そのものだ。それはソウルの母が生きていた頃からそうだった。

故にラーを王にして権力を得ようとしているとは考えられない。今でも十分な程の権力者だ。むしろラーがシュツイルオーレを毛嫌いしている事を考えれば、余計自分の立場を危うくしかねない。

にも拘らず何故、夫である王を殺害してまでラーを王にしたいのか――

「さあな。だが」

「何？」

「……親父は多分、知りたくないだろうな」

ソウルにはシュツイルオーレが自分の命を狙った事に対して驚きすらもない。ルクエールにしても同じようなものだろう。

だが魔王はどうだろう。自分の妻に命を狙われて。

「だからと言って黙っている訳にもいかないでしょう？ それともシュツイルオーレを殺して全てを隠す？」

「馬ッ、んな事！」

出来る訳がないし、していい筈もない。

「……シュツイルオーレの所に行く。処断は親父がすればいい。それに納得できなければその時考える」

「そうね」

「だがその前にラーに知らせて来る。どうせ『面倒だからどうでもいい』とか言うだけだろーがな」

ラーはもう判っているようだったし、シュツイルオーレの進退になど興味は無いだろう。しかし一応、それでもシュツイルオーレは彼の母親なので。

「待ってましようか」

「……そうだな」

そう長い話をするとも思えないが、万一という事もある。大勢でぞろぞろ行って話すような事でもない。

「少し待っている。行ってくる」

「ええ」

同じ館の階違いなだけのラーの部屋。ほんの数分で辿り着き、扉を叩く。

「俺だ。少しいいか」

「ああ。入れよ」

いつもと同じ、抑揚の無いラーの声。ソウルの方は少し緊張して中へと入る。

「どうした。何かあったか」

然程興味はなさそうに、しかしソウルの表情が硬いのに気が付いてラーの方からそう聞いてきた。

「……親父を殺そうとしていた奴が判った」

「そうか」

やや硬いソウルと対照的に、ラーの反応は淡々としていた。僅かにあった興味さえも消え失せたかのように。

「シュツイルオーレだった」

「ああ、だろうな」

「……どうして判ったんだ？ あの時にはそんな情報無かっただろ」

「あの女の事を俺はお前やルクエールより良く知っているからだ。」

「親父がどうかは知らねえがな」

「……」

事もなげにそう言われてソウルは重く沈黙する。ラーの最期の言葉はソウルの一番気の重い部分を直撃してくれた。

「……親父はやはり、悲しむだろうか」

「さあな。だが覚悟ぐらいしてるんじゃないのか」

「覚悟？」

「親父はお前のお袋さんが死んでもシュツイルオーレを正妃に戻さなかった。正妃として迎えた女を格下げにして、人間の女をとったんだ。恨んで当然だろう」

「っ」

そうか、シュツイルオーレから見ればそうなるのかと、ソウルは今初めて気が付いた。自分を嫌うシュツイルオーレの事など考えた事もなかったから。

「だが勿論、それでお前に八つ当たりするのは筋違いだな」

「……そうか」

敵である筈の女はとつくに亡く、シュツイルオーレの捌け口はもうソウルにしかなかったのだ。しかしそれにも耐えられなくなつてついに魔王にもと——という事だろうか。

「俺が言う筋合いはないかも知れんが、もう少しお前がシュツイルオーレへの態度を変えてやればよかったんじゃないのか？」

自分の子にまで見捨てられたシュツイルオーレが、どんな気持ちでこの数千年を過ごしてきたか。

不自然な関係であってもやはり自分の子は愛しいのか、それでもラーだけは生かして王にしようとしていたのだから——

「……」

ソウルの台詞にラーは顔をしかめ、煩わしそうな表情をする。少しぎくりとしたが、間違っているとは思わなかったので退かずにソウルはラーを見つめる。

（面倒だ）

シュツイルオーレの事などどうでもいい。本気でそう思う——が、そんな女にまで心に向けてやるソウルは嫌いじゃない。

（馬鹿な女だ）

ソウルの強さを見る。自分などより余程辛い居場所、それでもソウルは人に、優しい。

「……あの女は俺を愛してる訳じゃない。ただ怖いだけだ」

ラーとて始めは一番近い肉親であるシュツイルオーレが好きだった。今のソウルや父に向いている愛情と同じ位。

——だがシュツイルオーレはラーを愛してはくれなかった。

どれ程ラーが献身的であっても、シュツイルオーレが愛して欲したのはラーの才の方だった。

そして歳を経て、段々ラーの力を『自分が使える物』と見なしその力への比重がラー自身よりも強くなったのを知った時、悟ったのだ。

自分を本当に愛してくれるであろう者も、ラーが相手を愛し無償でその力を自分の為に使ってくれるのだと知れば相手はそれに頼るようになる。縋るようになる。

——それしか見てくれなくなる。

だからこれから先も魔王のためにもソウルのためにも表立って何かをするつもりは無い。けれど愛しく思う気持ちに嘘は無いし、助けてやりたいと思う。

だからユイリも保護したのだ。

「俺を王にすれば一応の権力は維持できるし、手を出さなきゃ俺の
カンに触れないと思ったんだろうさ」

本当に愚かだ。そう思う。

もし魔王でもソウルでも——どちらかが傷付けられたら、自分が黙
っていると思うのか？

「……それは、寂しいな」

「……そうだな」

ぽつりと呟いたソウルに、少し躊躇ってからラーは頷く。まさか
ラーが頷くとは思っていなかったのだろう、ソウルは驚いてラーを
見つめた。

「……もういいだろ。さっさと終わらせて来い」

少しばかり視線に居た堪れなくなってラーはソウルをそう促した。

「ああ。——ラー」

「何だ」

「俺はお前が兄で良かったと思ってる」

言われなくても判っている。そんな事をソウルが言うとは思って
いなかったし、正直ラーはそういう想いを言葉にするのもされるの
も嫌だった。

言葉は嘘ばかりつくから、言われた途端に嘘くさくなりそうで。

「……ああ」

けれどそこにその通りの想いがあれば、心を訴えるその言葉はとても暖かくて優しくて。

「俺もお前が弟で良かったと思ってる」

『良かった』とまでの素振りなど見せた事のないラーからの言葉に、ソウルは驚いた顔をして——実際驚いていたのだが——それから素直に、気恥かしそうに笑った。

それを見たラーの表情にも自然と柔らかな微笑が浮かぶ。

温かな言葉には心に淀んだ冷たいしこりすら溶かす力がある。

それは気持ちだけでは足りなくて、言葉だけでは意味の無いもの。

（本当に——お前で良かった）

心も言葉も持つ、ソウルだからこそ。

コンコン、と静かに扉を叩き、声を掛けた。

「妃殿下。ルクエールです」

声を掛けたのはルクエールだが、気配を隠してはいないのでソウルとマナと――そしてユイリが共にいると、判っている筈だ。それが何を意味するのかも。

なのでもし反応がないようであれば、強引に踏み込もうと決めていた。逃がさないためであり、そしてプライドの高い女だから万一の事を避ける為に。

しかし懸念しえいた事は何も無く、少しの間の後扉は静かにシュツイルオーレの手によって開けられた。

「意外と早かったわね。――では、行きましょうか」

「随分あっさりしているな」

言訳はしないだろうと思っていたが、それにしてもずいぶん落ち着きようだ。マナと会ったこの数時間の間に、そこまでの覚悟をしたのだろうか。

「まさか本気で、私が陛下を人間ごときが殺せると思っているのも？ 本気で私がラーと人間を契約させようとしても？ ふっ……少し考えて物をお言い」

一同の戸惑いを鼻で笑い、シュツイルオーレは迷いなく歩き出す。

「では行きましょうか。陛下の元に」

「……行ったらどうなるか判って行っているのか？」

「さてね。他の者ならば当然厳罰が下されるのでしようが、私をあの人がどうするかは判らないわね」

「正妃も同然の自分が処分を受ける事はないと？ 甘く見過ぎではなくて？」

魔王はそれほど甘くはないと、ルクエールの呆れた声にもシュツイルオーレは嘲うだけ。馬鹿にされた態度にルクエールの方がむっとしたが、それ以上何かを言おうとはしなかった。

第一邸へと向かう途中、擦れ違った人々が何事かと振り返る。何しろシュツイルオーレとソウルが共にいるなど前代未聞だ。

その視線の中を悠然と進み、シュツイルオーレは魔王の部屋の扉を開き、中へと入る。

「陛下」

「——お前達。どうした」

一瞬シュツイルオーレの名前を呼ぼうとして、しかし揃って訪ねてきた人数に言葉を変え、順番に一人ずつを確認しながらそう訊ねた。

「陛下。今回、陛下の殺害を依頼したのは私です」

「……………何？」

「私がアルバトラズに依頼しました」

啞然とした魔王にもう一度シュツイルオーレはそう繰り返した。冗談や何かでは済ませられない真剣さで。

「……………そうか」

言葉少なに頷いて、魔王はソウルへと眼を移す。

「使われたな、ソウル」

「な、何ッ!？」

「お前はシュツイルオーレにどのような処分を望む？」

どういふ事だとソウルが問い詰めるより早く、魔王の方からそう問われた。

「べっ、別に俺は――っつかそれは俺が決める事ではないであろうがッ!」

「まあ、そうだな。聞いてみただけだ」

あっさりそう言われて慌てた自分が馬鹿のようで、むっとソウルは押し黙る。

「お前はどのような罰を望むのだ？」

今度はシュツイルオーレへとそう問いかける。

「どのようにでも」

ふ、と笑ってシュツイルオーレも静かにそう返した。

「私が望むのは、ただ貴方に知って頂く事だけです」

「それ程までに恨んでいたと？」

「ええ。それ程までに、愛していたと」

ただ血筋と魔力の高さだけで選ばれた妃であり、彼の人となりすら知ったのは嫁いだ後だったけれど、それでもシュツイルオーレは

幸せだった。

自分は彼を嫌っていなかったし、彼も自分を嫌っていなかった。尊敬していたし、尊重してくれた。愛ではなかったけれど、十分だった。それは王の責務にある自分達には当然なのだと。

——あの女が来るまでは。

政治家として覚悟ができていなかったのだと言われればその通りだった。

本当に愛する人を得た伴侶を見て想ったのはただ——憎いと。

驚いた。驚いて、ようやく知った。

自分は彼を愛していたのだと。

愛されはしなかったけれど、自分は妃で、彼のもっとも近い女だったから——それで、満足しようと、そう心に鍵を掛けていた。

けれど彼は、愛してしまったから。他の女を。

「私は身に余る重責を負ってしまったのでしよう」

自分は政治家などではなかった。ただの女でしかなかった。だから、ソウルの母が、魔王が、ソウルが憎かった。

「知っていた」

シュツイルオーレの不満も嫉妬も、魔王は勿論知っていた。しかしそれでも、彼女に正妃の名はもう与えられなかった。

「俺も同じだ」

「ええ、知っています」

周囲の声を振り切ってまで人間を正妃にしたのだから。

「陛下は政治家として磨かれていた筈の私を信じて下さった。しかし私がそれに応えられなかった。それだけです。陛下には感謝しております」

愛しいから憎かった。愛しいから苦しかった。

「陛下。私に処罰を」

もう彼の傍にいるのは疲れたのだ。それが叶うのなら追放でも死罪でも、構わなかった。

「……お前を殺したくは無い」

「……」

「生きていてくれるか」

「ええ。それが貴方の望みであるのなら。陛下」

——その日のうちに、シュツイルオーレの実家への追放が決定した。

理由は公表されず、憶測が憶測を呼んだが、そのうちいつまでたっても自分に正妃の座を戻さない魔王との確執が実しやかに囁かれるようになった。

しかし彼女の心配をする者は多くはなかった。

実家は大貴族。今後の生活の心配もなく、また彼女が抜けた穴も他の重鎮たちが埋めて行く。

ラーを産んだ事で、国の中での彼女の役目は終わっていたのだ。

後の問題はただ、外交に面子が立たなくなる事を心配する声が上がったぐらいか。

新しい妻を娶るのも外間が悪い。歳を理由に魔王の引退が決定した。往生際悪くラーを押す声も多かったが、本人のやる気の無さは相変わらず、ルクエールの正式な即位が発表される事になる。

「ラー」

「どうした？ ああ、そーいやルクエールの戴冠式の日取りが発表されたな。どうする、逃げるか？」

「アホかな事どうでもいい」

そう言えばルクエールが王位を継ぐからどうの、という話をラーにしていたのだ。少し忘れかけていた。

今も事ある毎に言われてはいるが、本気で無理矢理、という感じではなくなった。もし無理にでもとなったら——その時また考える。

「じゃなくてだな！ シュツイルオーレ、静養とやらで田舎に引っ込むらしいぞ」

「それがどうした」

言った途端部屋の空気が下がった気がした——が、一回ごとと唾を飲み込んでから先を続ける。

「会わないつもりか。お前が今行かないと多分、最後だぞ」

「いい事だ」

「ラーっ！」

興味なさ気に言われた答えにソウルは非難の声を上げる。

「……ソウル。まさかと思うが、お前俺があんな女を嫌ってるの知らないのか」

「知っとるわ！ つーか露骨過ぎるわ！」

馬鹿にするなと吠えてから一息つく。

「……最後になるかも知れんのだぞ」

「だから、いい事だ。俺にとっては」

「母親だろう？」

「お前の母とは違う」

「……」

そう言われても知らない人間と比べられる訳もない。そしてそれ以上に何とも言えない気持ち がせり上がって来て、ソウルは言葉を切って沈黙した。

「……そうだな。お前は俺の母を知ってるんだったな」

「悪かった」

「別に。母とはいっても知らない人間だ。だが――」

その先は言い辛くて言い淀んだ。気にならない訳がない、しかし誰に聞く事も出来なかった質問。

「……どんな人だったんだ」

「綺麗なひとだった。あんまりお前似てないな」

「当り前だッ！」

そういえばというような調子で言ったラーにソウルは怒鳴った。自分は男なのだから、母になど似る訳がないだろうが。

「老婆んなっても赤ん坊のお前を抱いてた」

「……」

「成長した姿が見れないのが残念だと」

羨ましかった訳ではない。ソウルの立場に比べて自分は遥かに恵まれている。

しかしソウルを愛しみ、その細く非力な腕で守っていた彼女は、彼女こそが『母』なのだと憧れを抱いていたのも自覚している。

「……俺の方は見るどころか、何も知らないんだ」

「そうだな」

「……母が俺を愛していたのは、知っている。実感はないし信じられもしないが」

それを知りたかった。感じたかった。もう彼女はどこにもいなくて、名残が残っているのは庭だけだったから。

（……そうなん、だろうな）

何も知らなくても、何も知らないからこそ――母だから。

「同じだと思わんか」

「何がだ。シュツイルオーレとお前の母がか？」

全然違う、と鼻で笑ったラーにソウルは首を左右に振った。

「それが俺に判る訳ないだろうが。この場合は俺とお前が、だ」
「――？」

ソウルの考えている事が判らないというのはラーにとって初めてだった。戸惑ってソウルを見詰めると向こうも少し意外そうに苦笑した。

「知ろうとしないからな」

「俺はもう知っているだけだ。――大体何だ？ さっきから。お前もシュツイルオーレがどうなるうが知った事じゃないだろ」

少し前のソウルならば間違いなくラーの言う通りだった。清々したと思うぐらいだろう。
だが。

「本当に知っているのか？」

シュツイルオーレが何故こんな騒ぎを起こしたのか。

「ソウル……？」

「最後なんだぞ、ラー」

「……」

「シュツイルオーレに会いに行くぞ」

いい加減にしろと、言ってやって良かった筈だ。しかし不思議に今日のソウルの言葉は強くって。

「……判った」

ため息交じりにそう頷いた。

（静かなものね）

権力の中枢にいた頃は毎日があれば忙しなかったというのに、
一歩離ればこんなにも静かで、そして――穏やかだ。寂しさはあ

るけれど。

(さて)

そろそろ行くかと実家に別れを告げ歩き出そうとした所で。

サク。

草を踏む足音に振り返る。まさか今更、自分に用がある者などいないだろうと少々驚いた気分で振り返る。そして振り向いた先で佇んでいたラーの姿を見て本当の驚愕に眼が見開かれる。

「ラー……」

「……一言、挨拶に」

ソウルに言われて、などと人に言える訳もないので無感情にそう言った。

「そう。有難う」

そこにラー自身の感情がないのは伝わっただろうが、穏やかに微笑してシュツイルオーレはそう言った。

「何故こんな馬鹿な真似をした？」

「そうね……。同じく国を出るにしても上手いやり方はあったのでしょうけど。上手くやりたくなかったのでしょうかね」

ラーが言ったのは何故こんな成功が見込めないようなやり方を、

という意味だったがシュツイルオーレはそう取らず、自分の目的を既にラーが理解しているのを前提にそう答えた。

ラーは常に賢く、自分などでは誤魔化せないと、そう実の子に対して思っていたから。

そしてそのシュツイルオーレの答えで、ラーにも彼女が本気で暗殺を目論んでいたのではないと伝わった。

(……ソウルが言っていたのはこの事か?)

だからどうしたと思わなくはないが――

「始めから国を出るつもりだったのか？」

「ええ、そうです。判っていたと思ったのだけれど。ふふ、お前にも判らない事はあるのね。――でも、そう……お前も誰かに恋い焦がれれば判る日が来るかもしれないわ」

言いながら、しかしそれは無いだろうとシュツイルオーレは自分の考えを否定した。ラーならばきっと、望めば誰の一番にでもなれる。だからきっと、自分の様に愚かにはならないだろう。

「ラー、元気で。どうか幸せにね」

「……」

「触れてもいいかしら？」

「……ああ」

そう伺いを立てられるのが、今更だが違和感を感じた。ラーが頷くとふわりとシュツイルオーレはその体を抱きしめる。

「お前には済まない事をしたと思っているわ」

「……何をだ？」

「お前と一緒に、私も愛してもらいたかったのね」

ふふ、と自分の胸の辺りで笑うシュツイルオーレの声に負の感情は感じ取れなかった。

「けれどやはり、お前は私のように馬鹿ではないのね。良かったと思います、本当に」

「……？」

シュツイルオーレの安堵の理由が、まだラーには判らない。ラーにとってそれは、既に当然の物として心に根付いていたからだ。

（気に喰わないけれど）

気に喰わないが――ソウルは確かに、あの女の子だ。

魔王の愛した女の気質に、良く似ている。

「ありがとう」

（あ）

すいと離れた女の香りに、ラーは寂寥感を覚えて、そして自分で驚いた。

（まさか。何故）

今更この女に何の想いがあるとだと自問してシュツイルオーレを見て、気が付いた。

（ああ、そうか）

——同じだったからだ。

ラーが懂れた『母親』と、今の彼女は同じだったからだ。

（俺もソウルを笑えねえな）

いつからだっただろう。ずっと——見てこなかったから。そう自分に苦笑してラーはシュツイルオーレに微笑んだ。

「——！」

「元気で。また……そうだな。会いに行く」

「……ええ。ラー、お前も」

ひらりと手を振り、ラーは来た道を引き返していく。大分戻った道の外れで地べたに直接座ってヒマ潰しだろう、本を読んでいたソウルがラーの気配に顔を上げた。

「済んだか」

「ああ」

答えたラーの表情は穏やかだ。行く時はあれだけ苦い顔をしていたというのに。

「行って良かっただろう」

良かったと、思う。それは認める。だが。

「生意気だ」

得意気なソウルの頭を押さえ付けてからラーはそのまま止まらず歩き出す。

「あ、おい！」

その後を追い、隣に付いて歩きながらソウルは不思議そうにラーを見上げた。

「まさか歩いて帰るのか？」

「そうだな、少し」

「珍しい事もあるもんだ」

「たまにはな。――別に付き合えとは言っていないぞ」

「急いで帰って何がある訳でもないからな」

「そうか」

拒むでもなく頼むでもなく、ゆったりと二人で歩を進める。

いつもと何が変わった訳ではない。ただふと、気が付いた。

世界は普段考えているよりずっと、明るいのだ。

エピローグ

「――じゃあ、結局王位はルクエールが継いだんだ」
「ああ」

ルクエールの戴冠式を終えて数日後、事件後初めて魔界を訪れたマナとソウルは第一庭で顔を会わせ互いの近況報告に耳を傾けていた。

「残念。ちょっと見たかった」

「アホか人間が出席できる訳なからう」

「そうだけどさ」

「……俺の、だったら呼んでやっても良かったがな」

ぽつり、と小声で小さく呟いたのにきっちりマナの耳は拾ってしまっ
て嬉しそうに笑われた。

「うん。ソウルのだったら潜り込んでたかも」

「止めんかッ！」

「……それじゃあさ、あの、アレはどうなったの？」

「アレ？」

「愛人にするってやつ」

ルクエールの本気をマナは知っている。知っているから一時はそれでもいいんじゃないかと思ったが、今はもっと複雑で――正直に言ってしまうと、嫌だった。

「ああ、もう言われてない」

「そうなの？」

意外だったがほっとして、すぐにもう一つの可能性を思い付く。

「あの、じゃあ」

もしや正式に――と思って言い辛そうに口を開いたマナにく、と楽しそうに笑って。

「ラーがな。俺を愛人にするなら自分を夫にしろってな」

見物だった、とその時のルクエールの表情を思い出して笑いを噛み殺す。うっかりその話を聞いてしまった周りの重鎮がルクエールに是非にと勧めるのが、またおかしい。

「へえ。やっぱり仲良いんだね」

「悪くは無いと思うが」

ルクエールの愛人も良いんじゃないのかと、始めラーは言っていたのだ。それが変わったのはやはりシュツイルオーレの事が大きかったのだろう。

「ルクエールのため、じゃないか？　イヤでもそれだと別にラーに

思い入れは……」

「ソウルのため、だと思ふよ？」

もし先々、ルクエールが夫を持てば確実にソウルは憎まれる。ルクエールも同様だろう。

（自分のお母さんの二の舞を見たくなかったのもそうだろうけど）

ラーがソウルを愛している事を、マナは知っている。
だからきつとこれ以上、ソウルを憎ませるような火種を作리たくな
くて。

そして万一ソウルがルクエールの愛人になつたとしても、自分が正
式にルクエールと夫婦になつておけばその風当たりが弱まるのも勿
論、計算に入れてだろう。

「ソウル、ちょっと――って、お前ッ！」

噂をすれば何とやら。姿を見せたルクエールは予想外のマナの姿
を見てぎよつとした。

「あ、ルクエール。魔王就任おめでどう」

「え、ええ。ありが……ではなくて！ 何でお前に親しげに呼ばれ
なくてはならないの！」

うっかり応じかけてしまつて、慌ててルクエールは眉を吊り上げ
マナを怒鳴りつける。

「ん？ 宣戦布告？」

「なっ……」

何に對しての、なんて。勿論判らない程鈍くない。判っていない
鈍い本人は放つておいて。

「お互い障害アリで丁度いいんじゃない？」

「ふ……、ふふ……っ。勝負になると思つてゐるのかしら？」

「結構イーブンだと思うけど？」

ふふふ、とお互い笑っていない笑いを応酬して握手を交わす。

「な、何なんだ」

「俺等なんぞより女はよっぽど化物だって事だ」

「ラー。お前、何でここに？」

「知らなかったか？ 俺は結構この庭好きなんだ」

「知らなかったぞ！」

一体何だというのか、この状況は。

ここは静かで、誰も来なくて、一人だけの場所で――

（それが何だこれは）

騒がしくて堪らない。

（……だが）

悪くは――ない。

エピローグ（後書き）

ここまでお付き合いいただいた皆様、ありがとうございました！
最終的にバトルで締めがないのはやっぱりしまらないか、と思いつつ、まあこれはこれでありかとも思っておりますが、いかがでしたでしょうか。

読み終わった時にほっとして頂けていれば幸いです。

それではまた、ご縁がありましたら次のお話も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7553x/>

ソウルスティール！

2011年12月21日15時51分発行